
つまり

石本公也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つまり

【Nコード】

N2964X

【作者名】

石本公也

【あらすじ】

高校に入って、猛は急な眠気に襲われてたおれる。そして、目が覚めた彼は女になっていた。

しかし、それは純粋に女になっただけではなくて……

プロローグ

アニメや漫画などの、「その日は朝から変だった」とか言う感覚があるのなら、俺はあってほしいと思う。

何かが起こると言うのなら、少なくとも心の準備ができるだろうし、いつもと違う事をして、その「何か」を防ごうとしたりできる。

しかし、俺にはそんな事起こらなかった。

変な感覚も無く、急に。

今——ここで。

「っはあゝ、まったく、今日もだるいなあゝ」

学校の下駄箱からそんなのんきな声がする。

「そんな事言つて、今日の授業は終わったぞ、修

おさむ」

俺はのんきな声の主に向かって、軽く一言。

「まあな猛 たける、確かにもうだるい授業は去った！今日はもう自由なんだ！……しかしなあ
猛」

下駄箱で靴を取り出しながら、修はニヤリと笑みを浮かべ、軽く小馬鹿にした感じで、

「いくらなんでも背伸びして下駄箱を出し入れするってのは、どうかと思うぜえ？」

なんていいやがった。

「うるさいわっ？俺の場所が上の方にあるってだけだろ？」

少し苛立ったので、俺は反論。

俺の下駄箱は一番上なので、普通に取ろうとすると、少し……少し

届かないのである。

「だがお前しか背伸びして取るやつはいないぞ？身長158cm」「うるさいわっ？人の気にしてるところをっ！」

ウザいとは昔から思っていたが、人の気にしてる事まで言うのなら、俺は修のスネに向かって蹴りを入れー

「っだあ！」

俺の脚は、修に届く前に、俺らに近づいて来た人に当たってしまった。

「あぁっ！スミマセ……あぁ、なんだ燕 つばめ か……」

蹴られた足を抱えてうずくまっているやつに向けて俺は謝罪でなく、呆れた声を出す。

「酷くね？俺お前に蹴られたんだが！」

燕と呼ばれた男子は、顔をあげるが、

「よお燕、お前も帰りなら一緒に行こうぜ」

修も燕の足を気にしない事にすると分かり、立ち上がった。その時である。

「……………？」

俺の視界がぐらついた。

それと同時に襲ってくる、抗う事の出来ない眠気。

「？ おい、どうした？」

「……眠い……」

外にいるというのに、俺は意識を失った。

これが、高校に入っすぐ起きた、
災難の始まりだ。

プロローグ（後書き）

初めての執筆です。

よろしく願います

つまり、俺は女になったのか

1ページ(前書き)

初めての小説の、第一話で6人も出すのは、やりすぎたかなあ。

性転換

男が女になったり、その逆だったり、

クマノミとかの魚なんかで性転換する奴がいるらしい。

異性に興味を持つ年代に、興味の方向がずれて性転換に行き着く奴もいる。

まあ実際、こんな事説明しても意味が無いのだが……

「……………つああゝ」

目を開けると、真っ白な天井が目に入る。

なんだろう、何したんだっけ？

しばらく天井を見つめると、

「おっ猛、起きたのか。」

声が聞こえた。そして頭が活動し出した俺は、今自分がいるところが病院で、俺は学校の下駄箱のところで眠ってしまった事を思い出す。

「返事してくれよ。無視はねえだろ」

誰かいるのだろうか？俺はベッドから身を起こす。起き上がると見知った顔がいくつもある。

「しかしお前が倒れたって聞いただけでも驚きだったのに、お前すごい事になったなあ」

眼鏡をかけた男子が、何故か感慨深そうに言う。

「だよな優太 ゆうた。俺まだ信じらんねえよ」

横にいる顔の整った奴が言う。その後

「こんな事って本当にあるんだな」

「驚いたわ……」

なんて騒ぎ出す。倒れただけで騒ぎ過ぎなきがするので、

「お前ら、不思議な物を見た感じで……」

俺が溜息をついて下を向いたときだった。

俺は固まってしまったのだ。

ベッドに髪が垂れている。

——俺の、頭から——

「……………なんだこれ？」

あまりの事に声がうわずっている……いや、俺の声が高くなっているのだ。

何が起こったわからなくなり、考えられない。パニックのようになり、ベッドがガタンと音をたてる。その音にきずいたのか

「猛つちよつと落ち着け！ちよつと鏡見せてやるから」

長身の男子——修が棚の上にあった鏡を俺に見せる。

そこに写ってたのは、明らかな女の子の顔だった。

鏡を見る。そこには俺の顔ではなく、女の子の顔がある。頬をつねる。鏡の中の女の子も同じ動きをする、と同時に痛い。

俺は本当に女になったのか、確認動作をする。

「どうだよ、不思議な事が自分に起こった気分は？」

眼鏡の男子——優太がそう言ってきた。確認動作を終えた俺はベッドに座り直し、自分で事態を呑み込む為につぶやいた

「つまり、俺は女になったのか」

今俺がいるのは病院の隅のベッドの上。

そして、俺の足元の方に俺の友達がいる状態だ。

夢ならこんなリアルじゃ無い。冗談ならこの身体はなんだ？

わからなくても、わかってても変わらないんだ。事態をなるべく早く飲みこんだ方がいい。

「なあ燕、俺が倒れた後ってどうなったんだ？教えてくれ」

眠ったというのは少し格好悪いと思い、倒れた事にした。

「あ…ああ、お前がドターンってなったら、ピカーってなって、ギユギユギユって、気がついたら女になってて」

「すまん、会話から擬音語を外してくれ」

子供のような説明は、理解しにくいぞ俺は、そしてその後、燕の説明を10回位聞いた所で、ようやく俺は理解する。

説明すると、俺が意識を失った後、突然、俺の体が発光し出して、俺を覆っていた光がなくなると、そこには女になった俺がいたのだ。

「その後先生に説明して、救急車呼んで、今こうなってるんだよ」と、燕は語り終えた。

「先生に説明って、信じてくれたのかよ」

「そりゃ、お前を担いでたから簡単に納得してくれたよ」

俺が疑問を言つと、整った顔立ちの男子ー和樹 かずき が答える。答えながら和樹はバッグを担いぐ。それを見てから他のやつらもいそいそと帰り仕度をする。まあ確かに、ここは病院だし、いつまでもいる訳には行かない。時計を見ると、もう8時になっていた。「猛。明日ちゃんと学校来いよ。ここの病院、俺らの学校と関係あるところしいからな。明日ここからお前は通うんだと」

今まで黙ってた茶髪の男子ー飾 かざる が去りながら言った。

「学校行くて、女の姿でか？」

冗談のつもりで言つた言葉に、

「……勿論」……

五人揃ってこの言葉。

……まじかいな。

つまり、俺は女になったのか

1ページ（後書き）

最初の方は次々と書いて「こんな物語なんだ」ってのを定着させています。

さて次回は学校です！

彼らの通う学校について、ちゃんと説明するつもりです。

つまり、俺は女になったのか

2ページ（前書き）

小説は思ったより書くのが難しいですね。

ミスがでてきたり、話がとまったり、

さあ三回目です！

『私立清涼学園』えーっと、確かシリツセイリョウガクエンって読むーは、中等部から大学部までエスカレーター男子校。俺らは高等部になってすぐだが、中等部でもとと中が良く、今でもよく6人で過ごす。私立と言っただけあって、寮までバッチリ、施設は充実して、快適な学校である。それでも学費が年1000万前後なのは凄いと親が言っていたな。

4月だからだろうか、俺はそんな事を考えながら下駄箱で上履きにすむーずに、あくまでもすむーずに履き替えて、廊下を越え、自分の教室に入る。

「どうしてなんだよっ！」

教室に入り、また1分経ったかどうかと言う所で、俺は飾に怒鳴られた。耳に響く。

「うるせえな、どうしたんだよ一体。」

耳を抑えて、和室でお茶を出す心構えで俺は飾に言う。落ち着きなはれ。

「どうしたじゃねえよ！俺あ昨日あんなことがあったから、学校で美少女が見れると思ったんだよ！」

昨日の事は、病院の事だろうが……ははあん、昨日あまり喋ろうとしなかったのは、女になった俺に見とれてたという事か。ふふ……

……気色悪いな。

「でもしょうがねえだろ？朝起きたら男に戻ってたんだからよ」

教室の自分の席に着きながら飾に簡単に説明して、一時間目の授業を確認する。

「あああああ？久しぶりの女子いい？」

「男子校病だから仕方ないんだろうが、明らかな変態発言はしない

で良いだろ」

一時間目は古文で、ああまだオリエンテーションだから楽だなと思
いながら、飾をあしらう。

「変態つてひでえ？」

酷い何も、変態発言をしたのはお前だからな？そんな事をしてい
ると、廊下からドタバタしながら燕が舞い込んだ。

「おー遅かったな。どうしたよ」

俺は走って来たのか、息が上がっている燕に話かける。

「また…やっちった……」

ハアハアと肩でしていた燕は、不思議そうにこっちを見る。あまり
特徴の無い髪が、耳を覆っているので暑そうに思う。

「あれ？…猛昨日女子に……？」

「ああそれな？なんか朝起きたら男に戻ってたんだよ。てか、また
やったのか？」

燕は肯定の仕草をした。また中等部と高等部を間違えたらしい。

そうしてると先生がきて、授業が始まった。

その後は、先生に事情を説明しただけで、学校は終わった。授業は
ほとんど寝たが……

「あれ？お前寮じゃねえのか？」

学校が終わり、帰り道。修が話しかけて来た。

「ああ、今日も病院だ。男に戻ったから行く必要無いと思うんだけ
どなあ」

俺はふーっと長い息を吐く。春に似合わない行為だ。

「昨日はなんだったんだろうな、ホント冗談に思えて来た」

修が笑う。短めの髪が、ほんの少しだけ、風にそよいだ。

「俺はな、昨日ああだったから安心してしまったんだろう。でもな
？」

教室の外の廊下で、飾は真剣な表情……では無く、必死に笑いを堪えた表情をしていた。

「何で俺は今女になつてんだよ？」

「くくっ……し……知らねえよ……くく……あはははははっガッ？」

人の目の前で、しかも人の不幸で笑うやつには、仕置きをした。鉄拳だ。

「いってーな、殴んなよ。てか、ソワソワし過ぎだつて」

飾は、殴られた頬をさすっている。

「ソワソワすんなつてほうが無理だらろ……ただでさえ女になったのに、周りがさつきから見てくんだから」

なんてつたつてここは男子校である。

当然、女子がいるのはおかしいから、周囲が不思議な目線を送つても仕方が無い。

「たけるうっううっ！」

後ろから声が聞こえたかと思うと、いきなり後ろから抱きつかれた。

「っひゃあ？」

思わず素っ頓狂な声がでる。周りの生徒が一斉にこっちを見る。

「おゝ可愛い声だねゝ良いよゝイイよゝ」

何処かのスカウトマンみたいな胡散臭い褒め方をした後、俺に抱きついて来た和樹は

「いやゝ男子制服を着た女子つて、いいもんだなあゝ」

……どうやらこいつも、男子校に居続けておかしくなつてたらしい。

「おい猛。昨日は女子じゃ無かつたよな？」

今度はまえから、優太が話しかけて来た。

「優太……寝癖酷いな……」

飾が優太の頭を見てつぶやく様に言った。優太は飾の言葉に

「寝癖じゃ無い、決めてんだ」

なんて言うもんだから、

「……似合つてねえ！」「」

ツツコミが三重奏となつて響いた。

その時、

『一年三組、神鎌 猛（かみかま たける）君、神鎌 猛君、至急保健室まで来なさい。繰り返します…』

放送で名前が呼ばれた。

「猛、呼ばれたぞ」

「ああ、きこえたよ」

俺は急いで保健室まで走った。走りながら、一時間目はもうすぐ始まるものなんじゃないんだっただかと考えていた。

つまり、俺は女になったのか

2ページ（後書き）

思ったより一話一話が短いな…

これから少しづつ長くして行きたいと思いました。

さて次回は、保健室ですよ。

女になったって心境表現をもっとだせるようにしよう！

つまり、俺は女になったのか 3ページ（前書き）

更新は、結構大変な事だったんですね。
色々学んで行こうと思いました。

つまり、俺は女になったのか 3 ページ

保健室に着くと、そこには校長先生たかなしがいて、他にも世界史の小鳥遊先生たかなしや、理科の高梨先生たかなし、体育の山田先生やまたがいた。

俺が近づいていくと、俺に気づいた先生達は、笑顔を向ける。

「あゝ神鎌君、あゝ君が女の子になったといことなんだけど、えゝこの先転校するにしても、どっちにしる色々あるからね、今日は身体測定みたいなを行うんだよ」

校長先生がこつちを向いて言った。またハゲに侵食されてるし。

いやそんな事考えてるんじゃない、

「あの、そろそろ一時間目が始まると……」

俺はおずおずと疑問を言っていると山田先生が、

「一時間目は体育だから、測定にしたんだよ」

成る程、納得。

「じゃ、後は高梨先生、お願いします。」

校長、小鳥遊、山田先生の男性陣はそう言い残してさっさといった。

小鳥遊先生はなにしに来てたんだろう……。

「じゃあ、入りましょうか」

高梨先生にいわれて、俺は保健室に入った。

白のイメージが強く、壁には健康に関するポスター、学校で一番清潔な場所――保健室。

そのイメージに全く似合わない物があつた。

清涼学園せいりやうがくえんの養護教諭ようごきょううである。

養護教諭の武川先生たけかわは、何故か汚れている白衣を着ていて、タバコをふかしている。

ボサボサな頭は清涼感なんてなく、掃除ロボットにゴミと認識されてそうだ。

「武川先生、測定を始めたのですが……」

高梨先生が武川先生に話しかける。武川先生は、フーツと煙を吐き出し、

「あいよ」

とだるそうにつぶやく。そして「よっこらせ」と爺さんみたいに立ち上がり

「保健室こくしつを使う奴は滅多にいないんだかなあ」

と言っていた。一昨日俺が倒れた時も保健室に運んでるはずだから、珍しいのだろう。

武川先生が出て行った後、高梨先生の

「さあ、色々測るから上着を脱いで」

と言われて、俺のぼーっとしていた頭が起きた。

いきなり放送で呼ばれたから、体育着を持っていない。俺はブレザーだけを脱いだ。

「えーっと、まずは身長を測りましょうかね」

毎回毎回、この身長測定機しんちょうそくていきと対峙した時は、嫌な気分になせられる。

しかし、今回は女になったからと言う事で身長を測るのだ、小さかろうが、「女になったから」という事で、傷付くことなんかー

「身長は……158cmね」

男の時と同じって……。

そういえば、制服も男ものだが、べつにぶかぶかという訳じゃ無いし、気付くところはあったのか。

「次は体重ね。」

傷付いた俺を無視して、高梨先生が体重計のところから俺を呼ぶ。体重も、そんな変わってないんだろうな。

「体重は……46kg」

いや、少し減っていた。男の時より三キロ減ってどこか……

その後の座高も男の時と同じ結果だった。

その他にも色々測ったんだが、思い返すのも恥ずかしいので割愛とする。

測定が終わって、教室に戻ると、

「なあお前本当に猛？」

「さっきまでなにしてた？」

「女になったってことは……なあ？」

一気に質問攻めを食らった。

「うるせえよ。一気に質問すんなとりあえず落ち着けそして俺は俺だし、さっきまで身体測定だ、最後の質問には答えん」

俺は矢継ぎ早に言葉を繰り出し、飾かたねと燕つばめの所へ逃げた。

俺が近づいていくとふたりは

「おお、終わったか。どうだった？」

「今日の体育は疲れたよ」

と、話して来てくれた。

「こっちは身体測定だった。あんまし男の時とかわんなかったな」

「男の時と変わらなかったって…ああ、だから目線がいつも通りだなあと」

その言葉を言い終わった後、飾は腹を抱えてうずくまる。身長に触れる奴には鉄拳てっけんだ。

「確かに男と女だし、色々違うけど、大きな変化と言ったらこの髪位だからね。」

「でも確かにな、腰ぐらいまであるし」

燕の言う通り、女になって一番の変化はここだろう。まっすぐで、腰まである黒髪なんて、アニメぐらいのものだからな。

「にしても寮に帰ってから話そうぜ。周りのやつらも聞いてるし」
いつのまにか復活した飾が「確かに」と思わず言ってしまうような事を言うので、話を切り上げた。

その後の授業中。俺はずっと目線を感じて、全く集中出来なかった。

つまり、俺は女になったのか 3ページ（後書き）

考えてみたらまだまだ序盤…

さて今回は、清涼学園の寮の話です。

猛に新たなものがー

つまり、俺は女になったのか 4ページ（前書き）

この小説を少しでもよんだひとに、精一杯の感謝を。

つまり、俺は女になったのか 4 ページ

清涼学園の寮は、学校の北のほうにある立派な建物である。

中等部から大学部まであるもんだから、4階建てなのにかかなりの広さがある。しかも一部屋に二人という決まりがあるにも関わらず、寮は満員に近い。もう少しでかくなればイイと思うんだが、そこは予算という厳しい現実があるんだろうな。

そんな寮の一室に、俺ら六人は集まった。

「フーン、つまり、男の時も女の時も身長はたいしてっ？」

「身長だけじゃねえよ」

和樹が脛をさすっている。自業自得だ。

「でも他のところは男と女でちよつと違うんだろ？全く同じなのは身長だけなんだろ？」

「うるせえよ！確かに腹とか脚とかちよつと違うし筋量も減ってたけど！でもほぼ一緒だったの！」

「うるさい怒鳴るな？」

優太が一喝し、蹴りが飛んで来る。

その後、俺と和樹は落ち着いて蹴られた頬をさすっている。

「でも体格がほとんどかわんねえって、女になった意味なくねえか？」

意味ないワケじゃないと思うが、確かに変化ってやつなら、もつと変化があつてもよかつたんじゃないかと思う。変な意味はないぞ？にしても、神様の気まぐれにしても、なんでこんな風になったのかねえ。

その時、あまり喋って無かつた優太が

「ちよつと思つたんだが、この女の子の時に猛っておかしくないか？」

この一言で、状況整理の為の話し合いは、
「確かに猛じゃおかしいな」

「どんな名前にする？」

「沙耶ちゃん？舞ちゃん？どうする？」

女の時の俺の名前決めの話し合いになったのである。なんなんだこれ……

……

……

…

…

……

……

しばらくして、俺の名前が満足いくものになったのだろう。飾がその顔に笑みを浮かべて俺の前にいる。因^{ちな}みに俺は、話し合いの最初の段階ですでに弾き出されていた。

「では、お前の名前を発表する！」

声高らかにあげて飾がまっすぐに俺を見る。

俺はもうどうすればいいのか分からないから、長い黒髪を先をいじっていた。

「お前の名前は神鎌　香架理^{かかり}だあ！」

名前。当て字にも程があるだろ……

「どうだ？なかなかの物だろう」

すんごく得意なってるようなので、俺は

「かかりって名前はいいけど、漢字が適当すぎないか？」

正直に伝える事^{まこと}にした。するとどうだろう、飾は

「適当じゃあないっ！」

怒鳴られてしまった。めんどくせ。

飾の後ろを見ると、他四人がだるそうにこっちを見ている。こいつら途中で投げたな。

「あー、分かったよ。かかりでいいから」

てなわけで、女の時の名前は香架理になった。ぱちぱちぱちぱち…

「さあて、時間も遅いし、続きはまたにしますか」

その後、話し合いが雑談となり、しばらく経ってから修が切り上げた。

さて、少し前に書いたと思うが、清涼学園せいりょうがくえんの寮は、一部屋に二人という決まりがある。もちろん俺にもルームメイトがいて、そして今の俺は女である。

まあ、そのルームメイトは紹介する必要ないんだけど、何故なら

「じゃあ……かかり？こっからどうする？」

俺のルームメイトは石岡優太いしおか ゆうただからである。

つまり、俺は女になったのか 4 ページ（後書き）

ようやく序盤から抜け出しそう。なんかやった！とテンションが上がった。

さて次回は、寮の生活をお送りしたいです。

お楽しみ「？」に

つまり、俺は女になったのか 5 ページ（前書き）

キャラが何人もいるのに、掛け合いが少ないなとかんじて反省。

つまり、俺は女になったのか 5 ページ

この後どうするときかれても、返す言葉にこまるワケで、俺は何かやる事がないか考えて、ある事を思いつき、優太に言う。

「そうだな、一昨日も昨日も病院だつたから風呂に入ろうかな」

この言葉を言ったら優太が突然ブツと笑った様な音をだし、顔が赤くなったり慌てたりと、なんとも不思議な行動をしていた。新手の神様への祈り方だろうか。

俺が変な物を見る様な目をしていると、

「お前、結構落ち着いてるんだな」

優太が逆に俺の方を不思議なものを見る目でみていた。

「落ち着いてる？」

「いや、お前女になつたのに取り乱したりしてないから……」

「そこは……そうだな、確かに落ち着いてるな、俺は」

いきなり、突然女になった事。それは世間の常識ではあり得ない事。なんだよなあ。

「ま……まあ、お前が風呂入ってる間に、俺はメシでも作ってるよ……」

優太が何故か頷きながら言う。

「ありがたいが、わざわざ言わなくてもいいんじゃないか？」

思つた事を言つてみる。

「え？ああ、そうだな……あつじやあなんかリクエストあるか？」

いつもは言わないような事を言う優太。

ふと、俺は優太が何を隠そう考えていたかが分かった。頭のなかでは、豆電球に明かりがついた。

「リクエストは肉じゃがと炒め物。後はきんぴらかなあ」

「な！お、おい！なんで手間の微妙にかかるもの要求すんだよ」

優太が慌てる。どうしてかって？

「お前、覗こうとかって思つてないか？」

その瞬間、優太が固まった。フフ……どうやら凶星の様だな。

「やらしい事は考えないで、美味しい料理を作ってくれ」
俺はそう言って風呂に入った。

しばらく固まっていた優太は、フーツと長い息を吐き出し、料理に取りかかった。

冷蔵庫や棚から素材を出し、包丁などの器具を用意して、彼は料理を始めた。

別に適当に作っても良い筈なのだが、リクエストを取ってしまったという理由で、彼は肉じゃがを作るらしい。

彼がジャガイモの皮を剥こうとした時、

「なあ優太」

風呂に入ってるかかりの声がした。

「なんだ？」

作業を始め様とした手を止めて、彼は聞いた

「女の子って、どうやって髪を洗ってるか分かるか？」

質問の内容は、以外と重要なもので、しかし、男子中学から上がった来ている男子生徒をやや驚かせてしまうものだった。

「わわわかるわけねえよ？」

言葉が震えていた。

「風呂入ったはいいいけど、髪の洗い方がわかんねえや。」

それに髪って濡れると張り付くのな。なんか気持ち悪いから身体の前に持っててみたけど…やっぱ変な感じが「だあああああ？ 実況じゃなくていいから黙ってる！」

俺が風呂に入ってる間に、食事の準備はできなかったらしい。その後俺もてつだって、今日の夕飯は完成した。夕飯を食べている時、優太の顔が少し赤かったが、どうしたのだろうか？

………なんか話しづらい。

静かな食事は悪くないが、なんか重たい雰囲気だと食べていると、食べ物の味が分からなくなる。だのに、空気が重たい。

こついう時は、時間に任せるのがいいと思ったが、

「ゆ…優太」

あまりの気まずさに、俺は話しかけていた。

「なんだかさつきから「空気が」変な感じなんだが」

「へ？変って？ど…どんな」

「なんか「雰囲気」重たいし、「安易に」動けなくて…」

「お前大丈夫か？……あつじゃあサッサと寝ろよつ。うんそれがいそつしよう。」

優太は一気にそう言うと、俺を二段ベットに押しやった。俺はまだ眠いわけじゃないが、別に何かやる事も無かったので、そのまま寝る事にした。

疲れていた訳でもないのに、俺はすぐにねむりにたついた。

つまり、俺は女になったのか 5 ページ（後書き）

自分の小説を、読んでくれている人がいると分かって超感動。その夜枕が湿っぽくなりました。

さて次回から、かかりと猛のことに触れてこうと思っています。
おたのしみにー

つまり、この身体は……

1ページ（前書き）

ようやく第二章。「多分……」

つたないなあと思える自分の文を読んでもくれている人に、心からの感謝を。

昨日、いつもより早く寝たからだろうか、俺は、いつもより早く起きた。外から鳥の鳴き声が聞こえるし、早起きは以外と心地いい。

俺はベットからおりて、洗面所に向かう。洗面所に着いて鏡を見る
「昨日とか三日前が夢に思えるな、これは」

鏡には、男の俺が映っている。

「つまり、朝起きたら男に戻ってましたワイって事か？」

寮から学校に行く途中で飾かざるが言ってきた。春の桜は、ピンクと緑が混ざった色をしている。

「一昨日も男だったぞ忘れんな」

「まあな」

ゆったりした雰囲気と会話。陽気な天気は、色んな物事をどうでもよく感じさせてくれる。

「猛。て事は一日一日で男になったり女になったりするのか？」

優太が聞いてくるが、俺は答えない。

ついに春の陽気な空気さえ遮断しゃだんし、だるく、面倒で、催眠術師さいみんじゅつしがたくさんいる学校に着いたからである。

「今日もあの催眠術にどこまで対抗できるかな」

俺はそうつぶやいて、校舎の中に入ってた。

俺は少し考えが甘いようだ。男に戻ったーいや、男の状態ならば昨日みたいに周りの視線を感じることもないだろうと思っていた。
「いや、その考えは甘いよ、女の子になった奴が、翌日には男に戻つてるとかさ、十分おかしいよ」

燕つばめがこう言うまで、俺は痛いほど視線が集まる理由が分からなか

った。

「燕、いつになったら学校は終わるんだ？」

「まだ一時間目始まってねえよ？」

その日、俺はずっと狸寝入りたぬきねいを決め込めなかつた。

休み時間になると、飾と燕が教室を飛び出して、俺は溜息をついた。一瞬でクラスの連中に転校生の様に囲まれ、質問ぜめにあつたのだ。学校が終わる頃には俺の携帯にはクラスの連中の名前がびつしりと埋まっていた。

学校が終わると気分がすつと軽くなる。俺にくる視線の量が減り、先生に無駄に当てられる事も無く、春の陽気な空気に触れられる。ああ、幸せだなあ。

「ところでお前ら、休み時間にどこ行つてたんだ？」

俺は桜を見上げながら聞いた。

「ちよつとな、先生に確認取つてただけだ」

修が答える。

「なんの？」

「なんかの」

追求しようとして、かわされた。

俺は修の表情から何か分らないかと思つたが、158cmと174cmとでは、顔を覗く事すら出来ない。しょうがないから諦めて、後の楽しみという事にしておく。

展開が早いかもしれないが、寮の中で俺ら六人は、また話し合いを行っている。

「男になつたり女になつたりつてのは、やっぱり寝てる間に起きてると思う」

まず燕が口をひらいた。

「確かにそうだろうな」

そこに修が答える。

「こいつが寝た時にずっと見てれば、身体からだが変わる瞬間が見れるのか？」

これは和樹だ。

「だったら俺は徹夜てつやするね」

これは俺。

しかし、何人も喋喋つてると、だれが喋喋ってるか分からんな。

「なんで徹夜すんだ？」

和樹が聞いてくる。

「なんでって……回避出来るならしたいだろ、こつゆうものは」

俺と和樹は、呆あきれた目線をぶつけ合う。なんでこいつは呆あきれた目線を送送ってくんだ？

「よし！じゃあ今日はオールだああ？」

飾の高らかな宣言に「おおっ！」と俺らは乗った。

この事が、後々面倒な事の引き金だった

つまり、この身体は……

1ページ（後書き）

このあとがきも、少し寂しいと感じたりそうでなかったり、
さて次回は、友とはしゃぐオールの話。
お楽しみに。

つまり、この身体は…… 2ページ（前書き）

脳みそこねくり回して考えても、なかなか浮かばない文章。
難しいですね。

つまり、この身体は…… 2ページ

オールと言っても学生寮で行うから、あまりうるさく出来ない。そこで俺らがやったのは

「おい、そこ宝出て来るぞ」

「わーってるよ」

「そこ失敗すんなよ」

「うるせえよ………あ………」

「なにしてんだよー」

ゲームと、

「俺この芸人好きだな」

「？ 何がいいんだ？」

「まあ見てろ………」

「………つぶつ！」

「な？面白いだろ？な？」

TVと、

「やっぱり地理の藤田先生はカツラだよ。じゃなきゃあんなに揺れる頭をどう説明すんだよ」

「確かにあの頭はおかしいよな、授業中笑っちゃうわ」

「なんでカツラでごまかすんだ？理解できん」

「お前は将来分かんと思うよ」

「将来ハゲるって言いてえのかおい！」

雑談をしていた。

そんな感じで順調に夜が更けていた時だった。

「？」

突然、俺をあの日、校舎を出た出てぶっ倒れた時と同じ様な、抗えないと直感で分かる眠気が襲って来た。

俺はそのまま倒れ、眠ってーーー思ったより早く意識を取り戻した。もちろん、女の身体で………

「つまり、これから先お前徹夜出来ないな」

俺の方を見ながら、燕が言う。

こいつ、他に言う事ないのか？

「しかし驚いたな、俺が最初に見たのと変わり方が違う」

「変わり方が違う？」

修が気になる事を言うので、俺は尋ねる

「あんな、ズズズズズってなつてふわーとなつたとおもつたら、ぱあつとなつて、お前が女になつてた」

燕がよくわからない言語で説明するのを無視し、俺は優太に説明を求めた。

「あー、だから…そうだな、ズズズズズってところは、なんか黒いモヤ？みたいなのがお前の周りにできて、ふわーってところはそのモヤがお前を包み込んで、ぱあつてところはその包み込んでたモヤが弾ける様に消えたんだ、で、女になったお前がいたと」

別に燕の説明を説明しなくてもいい筈^{はず}なんだが。まじめ？

えーっと、確か最初は俺の体が光に包まれたんだよな。で、今回は黒いモヤに包まれたと。……よく分からん

「おら、とにかく学校だ。準備しろ」

飾にせかされる。

「俺ら何してる？」

「たけ…かかりの準備が出来るまでのんびりしてようぜ」

「よし！ここで待つてよう」外にいる！

部屋に居続けようとする五人を俺は廊下へ放り投げた。

学校の事なんか書いたつてしょうがない。

周りの目線がやや減つて、催眠術師の前に俺はあっけなく撃沈^{げきちん}し、別にどうでもいい事をホームルームでやってるくらいだからだ。

そして寮の中で――も、あまり書く事がない。日毎に入れ替わり、徹夜が出来ないと知ったが、他に何をする訳じゃない。

俺が不思議な状態になってから、一週間弱経つから、珍しがらない。ただ和樹が

「かかり、一回でいいから『お兄様』と言ってくれないか？」

なんて言うので鉄拳を与えておいた。

こっからはイベントや行事が起こるまで書くこともないだろう。しばらくは気楽にいれそうだ。

しかし、そんな俺は、本当に甘い。

つまり、この身体は…… 2ページ（後書き）

暇な時、ねり消しをいじってます。

ぐにぐにぐにぐにぐに……

さて次回は、ややっこしい事このうえない！

つまり、この身体は……

3ページ（前書き）

秋になって、寒くなって、長袖をよくきるようになりました。ここから朝、布団からでるのが大変になりそうですね

つまり、この身体は……

3ページ

「おい！起きろ！布団剥いじまうぞ！」

朝、俺がこの後何も無いだろうと思った翌日。俺は優太の声で起きた。

「なかなか起きねえ奴は……こうだっ！」

「ぐあっ！」

優太の奴、まじで布団を剥ぎ取りやがった。

俺は丸まって、優太にじつとりとした目線を送る。と、

「お前……昨日女だったよな？」

不思議そうな目線で返された。

「……………そうだよ」

見事な安眠妨害を受けて、不機嫌ふきげんな俺は、むすつとして言葉を返す。

「今お前女だぞ……………」

「嘘っ？」

一瞬の不機嫌は一瞬で吹き飛んだ。

俺はベットから跳ね起き、ドタバタしながら洗面所の前に飛びつく。

「まじか……………」

ひとことに性別が変わっていたのに、ある日俺は、二日連続女になっていた。

「二日連続女になったってお前…それにしては落ち着き過ぎてないか？」

寮の中で修が苦笑いして言う。他の四人は、少し用事があるとかで学校だ。

あと、言い忘れてたが学校はもう終わってる

「落ち着き過ぎ？」

俺を見て落ち着いてる様に見えるのか？別に普通だと思うが…

「いや普通じゃない。女の時も風呂とかトイレとかある筈なのに、抵抗が無いお前は普通じゃない」

そう言われてみれば、俺は女の時に普通に風呂に入っていた。その時困った事といえば、髪洗い方が分からなかった事ぐらいだ。

—（あの後、ネットで探すのに苦労した）

やり方には戸惑うものの、女の時に見た裸には、戸惑う事はしなかった。

そう修に言つと、

「お前、最近自分のタンスの奥の方。ひらいてねえな？」

修は、確認をとるみたいに質問した。

「ああ」

質問に答えると、修は溜息をついた。

「猛。お前変な身体になってからそういうモンに無関心になったんだな」

「……………えつと、つまり、俺は女にも男にもなれる様になった代わりに、俺は性欲が消え失せた」と

「そーゆー事だ」

そーゆー事と言われても、納得出来ない。

俺がしばらく考えていたが、今聞こうとしていたのは別問題だと思いつ出した。

「で、俺が二日続けて女になってんのはどうしてなんだ？」

「どうせあの徹夜だろ。お前あの時ぶっ倒れたからな。」

答えはすぐに帰ってきた。

俺はパニックにでもなっていたのだろうか、よく考えたらすぐに当てはまる事をしていたじゃないか。

「でも、徹夜した時の反動？は、どの位続くんだ？」

「そこはしらん。けど、男で徹夜した時と女で徹夜した時とじゃその反動とかは違うのかもしれないし、色々分からない事があるな」
うーん。この後何回も徹夜すんのか？

それって結構辛いぞ……

俺がそんな事を考えていると

「まあ、身長の話はどうせもう止まってるだろうし、徹夜しても問題ねえよ」

鉄拳？

「うぐうつ？」

修が俺に向かって身長のことを言ったので

「まだ止まってねえよ！」

俺はすぐに反論した。

その時、飾達が帰ってきたのだろう。

廊下の方から声と、何かをぶつけている音が聞こえた。

つまり、この身体は……

3ページ（後書き）

性転換と言うジャンルは結構好きです。

戸惑ったり、精神が身体に対応してきた時の主人公の心境がとても良いんです。

さて次回は、飾達が持ってきた物の事。

お楽しみに〜

つまり、この身体は……

4ページ（前書き）

10月10日の10時10分頃に第十話を投稿。

朝から来て下さった方には申し訳ないですが、これだけはどうしてもやりたかった。

飾達が帰ってきたのだろう。

廊下の方から声となにかがぶつかる音が聞こえた。

「おっ帰ってきたか」

俺がそうだった時だった。

扉が勢いよく開き、飾達も勢いよく出てきた。が、勢いよく開いた扉が壁にぶつかって跳ね返り、そのまま扉の方から出てきた燕に勢いよくぶつかった。

「ったあゝ？」

燕が頭を抱えてうずくまる。

凄まじく馬鹿なことをしている奴等は、なにやら直方体の箱を持っており、どうやらそれを運んできた様で、俺はその箱が何なのか気になった。

「おい、その箱はなんだ？」

俺が聞くと、和樹が待つてましたと言う様ににたあゝと笑った。

「気になるか？教えてやろう！」

そう言つて箱を勢いよく開けた。

箱から出てきたのは、やや明るい色のブレザー、綺麗で新しいYシヤツ、そしてチェックのーースカート。

ブレザーの肩に着いている、清涼学園の紋章エンブレムこれはーー

「清涼学園の女子制服だ！」

ここ……男子校だよな？

「なんで男子校に女子制服があるんだ？」

俺が素直に聞くと、

「ひごとに性転換するお前の為に、校長先生が協力してくれたんだ」
素直に優太が答えた。それにしても、いつ校長先生に相談したのだろつか？

「それよりさ、さっそく着てみるよ。それ」

修が俺に催促さいそくを促す。

「これ……サイズ合ってるのか？」

「かかり、身体測定受けてたたる？」

そう言えばそうだった。ほんの一週間前のことなんだよな。

「さ、俺らはお茶でも飲んで「出てけ」

ほかのやつらを部屋から追い出し、俺は箱から取り出した新品の制服に着替え始めた。

「あれっ？ボタンが左右違う？裏返し……じゃないし、地味に女子と男子って違うのか」

制服の違うところなんかズボンとスカートぐらいだと思ってた。

それに、スカートにフアスナーがあるだなんて知らなかったし、色々分からない事があるな。

「おーい、終わったかあー？」

そう言うと同時に部屋に入ってきて来る和樹。ノックとか返事を待つとかしないのか、こいつは。

和樹の後から他の四人も入ってきて来たが、その歩みはすぐに止まった。真っ直ぐこちらを見つめる五人。

「なんだ？やっぱおかしいか？」

俺が気になって聞くと

「いやいや、女子が女物の服を着ると、こんなにも違うのかと」

こんな答えが帰ってきた。

「すっげえな。スカート折ってないけど、先生達のセンスは意外と有るのな」

優太が感心している。たしかに、オシャレとはいかないが、ダサイワケではない。

驚いたな。

「明日お前は、これを着て学校来い！」

和樹が俺に人差し指をビシッと突き立てながら言った。

女子制服にまだ慣れていない俺は、たとえ女の身体でも、それは少し恥ずかしいと思っていた。

つまり、この身体は…… 4ページ（後書き）

あらずじをほんの少しだけ変えました。

キーワードとかも増やそうとか思っています

さて次回は、入れ代わる身体のいやしい実験
お楽しみに〜

つまり、俺が女にしたワケで… 1ページ（前書き）

初めて読んだ性転換物は、性転換と言うより入れ替わり物で、しっ
かりとした形を持っている訳ではありませんでしたが、やはりそこ
からハマったんだと思います。

つまり、俺が女にしたワケで… 1ページ

青い空、桜舞う道を越えて、新入生達は新しい生活を、新しい気持ちで迎える。

なんてゆう新学期の腐り文句が似合わなくなる程、桜はとうに散り切って、葉桜と言った方がいくらいに青々としている。周りも高校に上がったばかりの時みたいにしてなくて、日々だるそーにしながら、学校に向かう。

教科書は全て学校に置いてあるし、学校の敷地内しきちないにある寮から歩いていてもくっ付いているこのだるさは、一体なんなのだろうか？

そんな事を考えながら、下駄箱に行くと、

「どうして男になってんだ」

昨日女子制服で来いといってたからだろうか、和樹が下駄箱にいた。「しらん。朝起きたらこうなった。流石に男の状態で女子制服を着る訳にはいかないだろう？どうやら、徹夜で強制的に変わったら戻らないのは、一日だけらしいな」

「強制的？……」

何故そこに反応するのだろうか？

和樹はそのまま走って行ってしまったので、俺は背伸びをし、上履きを取り出すことにした。

教室に入ると、飾と燕がきていた。

「今日は久しぶりに体育に出れるよ」

そんな事をいいながら、俺は席につく。

「そうだな猛。ただ今日は縄跳びだ、縄を忘れてたら意味ねえよ」

俺は本当に甘かった。

そんなこんなで学校が終わり、寮に帰ったが誰もいない。優太すらいなかったのはどうしたのだろう？ そう思った時だった。

「猛帰ってるかー？」

皆さん帰って来ました。

「おー帰ってるぞー」

俺は的当に返事をする。

「なんか菓子でも出そうか？」

俺がそう言って振り返ると、

「……お前らなにその顔」

全員、こっちを見てなにやらニヤニヤしている。何故だろう、気持ち悪い。

「なに考えてんだよ」

「明日の事」

「明日？」

はて、明日何かあっただろうか？俺が考えていると修が

「ああ……まさか現実世界でこの謎に取り組めるとはおもわなかった」

拳を握りグツとしながら言った。

「謎？」

「ああ……考えてみたら分からなかった謎……それが今は実験することが出る！」

実験って……なにをするつもりなんだ？

「猛？お前は、徹夜をすると、強制的に性別が変わる！」

和樹……恥ずかしいと思わないのか？

言葉と同時に体も動いてるぞ？

「強制的に……この部分が、この実験で一番重要なところなんだ」
飾……何かに感染してないか？

なんだかこいつ等のテンションがおかしい。

話をするならいつもみたくその辺に座れば良いのに、わざわざ立ち上がって、熱っぽく語る必要はどこにもないだろう。

俺は何でそんなにテンションが高いのか分からなかった。

「お前ら…実験とか謎とか言ってるけど、それは一体なんなんだ？」
その言葉を待ってましたと言わんばかりに、
俺にビシッと指を突き立てながら言った。

「　　してる時に男になると、一体どうなるのかと言う偉大な謎
に取り組めるのだよ」

……そんなピーとかバキューンとかで消されそうな単語を言わない
で下さい……って

「なにをするつもりなんだ？」

ちよつとまで、それは最悪な実験だ。

つまり、俺が女にしたワケで… 1ページ（後書き）

きっかけの物語は、進研ゼミの+i紹介マンガでした。また読んでみたいですが、もう記憶にしかありません

つまり、俺が女にしたワケで… 2ページ（前書き）

10月4日にスタートしたこの小説。

作中でも一週間経ちました。

ここから小説はすごいはやさで時間が進むんだろっなあ。

つまり、俺が女にしたワケで… 2ページ

学校で俺は考えていた。

偉大な実験とやらに付き合えば、そりゃあもう大変なことになるだろう。

そうなるのは出来れば避けたい物で、俺はあいつ等に見つからない様にどうやって外泊届けを提出しようか考えていた。

外泊届けとは、その名の通り寮では無く学校の外で泊まるのを許可するものである。

外泊届けを出さなければ学校も搜索に加わり、逃げられる訳がない。ずっと学校にいれば、あいつ等に連行されるだろう。

外泊届けを出さなければ、逃げる術は無い。問題は、外泊届けは寮に届けなければならぬ事だ。

俺は頭で考えた作戦を、頭の中で復習してみる。

まず、学校が終わったらずぐに外に出て、あいつ等が帰った後、寮に行く。

外泊届けは寮の入り口にいる人に出せば良いのだから、あいつ等が帰ってすぐなら部屋にいる筈だから心配ない。

だから、実験には協力しない！

そうして、終業の鐘がなるやいなや、俺は全速力で駆け出した。

階段を降りて下駄箱に着き、靴を取り出そうとしている時だった。

「お前の身長じゃ、どんな作戦を考えてようが、下駄箱で止まるから意味ねえよ」

呆れた目線を送って来る五人。

こうして、俺の計画は下駄箱によって阻止された。俺はやっぱり甘かった。

「さあ、もう諦めたらどうだ？」

刑事ドラマにありそうなセリフを優太が言う。そんな俺も、死刑執行を待つ犯罪者の様な心境だ。

「まあ逃げられ無さそうだけだな」

何回か逃走を試みたが、全て失敗した。眠ろうとしたが、叩かれて起こされる。もう、実験に強制参加させられそうだ。

「おい、そろそろ時間だ」

修が言う。何でこいつ等は俺の起床時間を知ってるんだ？

「ふむ、いよいよか…」

その言葉は、俺には悪魔の言葉に聞こえた。

色々言いたい事はあるだろうが、作者の年齢上書くことができないので割愛っ！

「うつうつ……」

最悪の気分が目が覚めた。

飾が顔を覗き込む。殴ってやりたいが力が入らない。俺は体を起こした。とー

「その子は……誰？」

俺の視界に、さっきまでいなかった奴がいる。

「お前らは、とても素晴らしい結果をだしてくれた」

修が言う。いやだからあれはだれだ？

「紹介しよう。……燕ちゃんだ」

……………あの娘が燕っ？

つまり、俺が女にしたワケで… 2ページ（後書き）

最近は、寒いなあと思ったり、暑いなあと思ったり、涼しいなあと感じたいです。

さて次回は、二人目の女子生徒
お楽しみに！

つまり、俺が女にしたワケで… 3ページ（前書き）

空に浮かぶ雲は、不思議な模様を描いたりしています。あの雲何かに見えるんだけどな〜って思ったり。

つまり、俺が女にしたワケで… 3ページ

俺の視界が捉えたその子は、髪が俺の女の時みたいに腰までは無く、背中で止まっている茶が少し入った黒髪だ。

なんと言うか、美人顔。でも笑ったらかわいいだろうなーってかおをしてる。

視線がどうしても行ってしまうのは、その胸。しかも完全な男物を着ているから余計に目立つ。

「えーっと、これが燕しほ？」

俺は半信半疑で聞いた。着ている物はさっきまで燕が着ていた物だからだ。

「ああ……燕だ」

そう言った和樹ですら、まだ信じていない様だ。

「じゃあ、お前らの見たままを教えろ」

今度はしっかりと聞いた。

話をまとめるところなる。

俺の身体からだが変化する時、俺の身体が発光して、俺の姿が確認出来なくなるほどまばゆい光に包まれ、光が消えると身体が変わっているのと、黒いモヤの様な物が現れて、俺の身体を包み込み、モヤが消えると身体が変わっているのと、二つの変わり方があるのだが、今回はモヤが現れて、俺を包み込む時、そのまま燕ごと包み込み、モヤが消えると、二人とも変わっていたとゆう。

つまり、俺がいれば、人類股間計画じんるいこかんけいかくは完遂出来る。

「明日もしこのままだったら、一体どうすんだ？」

不安そうに燕が聞いた。しかし、聞かれても困る。

「学校……行くしかないだろうな」

俺は最初女の状態で行った時を思い出していた。一週間、経ったのか。

「燕、我慢出来なかつたら保健室行つても平気だからな？」

俺はそうこえをかけた。

教室で燕はやはり、周りの視線を集めた。

俺の時も視線があつた。ヒソヒソこえも聞こえた。何を言つてんのか分からないから、どういう考えで自分を見てるのか分からなかったから、怖かつた。だからこう言つておいた。

「おお…ありがとう、どうしても我慢出来なかつたらそうする」

燕はそう言つたが、相当こたえてるみたいだ。俺は飾に話しかけた。

「おい、お前先生に話しつけてどこかの一時間身体測定であいつ教室から剥がしてくれ。かなり参つてるぞ」

「お前みたいに神経図太くないからな、あいつ。分かつた、武川に言つてみる」

飾はそう言つて教室を飛び出した。

授業はまだ三時間目なのに、燕はもう気分が悪そうだ。この後、耐えられそうには見えない。その時

「一年三組、山瀬^{やませ} 燕君、一年三組山瀬 燕君、至急保健室に来なさい。繰り返します。一年三組………」

飾が上手くやれたみたいだ。これで大丈夫だろう。俺はそう思ったが、フラフラと教室を出た燕を見て、少し不安になった。

つまり、俺が女にしたワケで… 3ページ（後書き）

夢で見た事もないアニメを見たりします。

この小説も夢が元だったりします。

さて、次回は、慣れも疲れもお楽しみに。

つまり、俺が女にしたワケで… 4ページ（前書き）

一度だるいと思ってしまうと、その後の事はできなくなってしまう。だるいと考えない様にします、

つまり、俺が女にしたワケで… 4ページ

「なあ、俺が元に戻る方法はないのか？」

寮に帰って燕が言った。かなり切実そうだが

「考えとしては、今度は逆で をすれば戻るが、今のこいつのは多分ジジイより酷そうだからな」

修が希望もなにもない事を言う。

「つまり、俺は戻れないと」

燕がうなだれる。こいつが女になってから一度寝ていて、その時変わらなかった事から、燕は俺の様に身体が変わらない様だ。

空気が重くなる。飾が落ち着き無く動き回って、カレンダーの所で止まった。

「おい、でももうゴールデンウィークだぞ。燕、この期間を使って慣れておけよ」

この一言で、重かった空気がガラリと変わった。

「そうだ！ゴールデンウィークだ！」

「遊ぶぞ！遊びまくるんだ！」

「学校が無いんだ！はっはっはっ！」

ゴールデンウィーク……五月にある連休だ……そうだ！もう五月だ。ふと燕を見ると、まだなにかあるのか、考えている。いつまでも暗いと殴りたくなるなあ

「休みの事考えようぜ、不安だろうが」

すると燕は、

「あ、そうじゃ無くて、夜どうしようかと」

夜？何の事だ？

「俺の相部屋、和樹なんだよね…」

……それは確かに考えとかなきゃな。

そこにゴールデンウィークで盛り上がってる飾がやって来た。

「良く見るとお前ら背丈ほとんど一緒だな」

飾は何故か陽気だが、まあ確かに、今まで見上げていたかおが、視線の先にある。

「お前身長幾つだった？」

「155」

短く答えがかえってきた。それを聞いて俺はガッツポーズを取る。ついでに踊り出す。

「おい猛。お前いつ頃家に行くんだっけ？」

優太が聞いてきたが、俺の耳には入らない。

「聞けっ！」

頭を思いっきり叩かれて、俺の喜びの舞は終了した。

「家族のそこにはいつ頃いくんだ？猛？」

家族は、俺が女になったと言う事を、学校から連絡で聞いているだけだ。だから俺は家族に、ゴールデンウィークには帰ってこいと言われている。

「早めに行っておくよ。」

俺はそう言って、修達の方を見ると、和樹が縄で縛られていた。

次の日。俺達は、優太の荷物と、燕の荷物を運んでいた。昨日、和樹と同室だと危ないんじゃないかとなったからだ。（男と女なら、誰でも危ないだろうがな）

そして今日、寮母さんに許可を取って荷物を移動させる事にしたのだが、突然の事で、俺達が荷物を運ぶ事になったのだ。

しかし、日にちを間違えたな。徹夜してから二日経ったから、今俺の体は女だし、今日はお天道様も頑張つて、気温が三十度まで上がる様だし、その中で働くと、汗がすごい事になるのだ。重たい物は男子共に任せて、俺と燕は小物を運んでいる。因みに、燕は女になってからも燕だ。

俺の時みたいに名前を変えようとしていたが、燕と言うのは女の子の名前でもおかしくないだろうとの事で、燕のままだ。

「ほら後それだけだよ」頑張れ日本男児」

なんて言葉とともに、最後の荷物が運ばれ、もう夜になっていたが一応引越は終わった。クタクタに疲れてすぐに寝ようとしていた燕を、風呂へと押し込んだ。俺も出来れば寝たかったが、風呂に入らないとまずいと思っていたので、燕が出た後すぐに入り、シャワーで済ませ、倒れる様に眠った。

明日は、家族に会いにくーーー

つまり、俺が女にしたワケで… 4ページ（後書き）

ゲームをしている時のタブーは、やってるときに、これ将来役に立つんだろうかと考える事です。

さて、次回は、家族登場。

お楽しみにー

久しぶりの自分の家。

その前で、俺は考えていた。

前に来たメールでは、俺が女になったと知った、と言う様な内容だった。しかし、実際俺は男になったり女になったりと、色々面倒な身体になったのである。家族がこの事を知らなかったら、俺の口から説明する事になる。

だが俺は、女になる瞬間、男になる瞬間、肝心なところは聞いた話だ。上手く説明出来るだろうか？

まあ、考えても仕方がないだろう。俺は扉を開いーーカギが掛かってる。

気を取り直して、俺はインターホンを押した。

しばらくして、カギの空いた音がして、扉が開いた。

「猛？」

「よっ母さん。帰って来たよ」

玄関で母親と少し話してから、俺は中に入りリビングに向かった。

「久しぶりのアターック！」

「ガッ？」

弟が蹴りをいれて来た。公立の中学に通う弟は、空手部に入ってるとかで、成果を見せ付ける様に俺にぶつけて来たのだ。がはっ！家に帰って来て一分も経ってないのに床に手を付けさせられるとはな。

「いてーよ。阿呆が…」

俺が腹をさすってるので、つまらないだろう。弟が俺の前に来てわざとだろう。見下ろした。因みに弟は167cmある。

「おい、わざと見下ろすな、お前の机の下から三段目の奥にある菓子食い尽くすぞ」

「なんで知ってんの？」

そう言つて弟は二階に駆け上がった。リビングを見渡したが父さんがいない。ゴールデンウィークなのに忙しくしてるみたいだな。

さて、俺も自分の部屋に行くか、

「猛。さつき翔^{かける}の声がしたけど、何かしたの？」

多分お菓子を移動させてんだろ。

「別に、なんでもないよ」

俺はそう言つた。

「そう。学校からね、お前の事を聞いてたけど、その、女の子にもなるつてのは、やっぱり本当なの？」

にもー！と言う事は、俺の事はしっかり伝わってる様だ。

「まあ、ホントかな」

俺はそう言つて自室に向かった。

自分の部屋の扉を開ける。そこは、前と変わっていなかった。小学校のころの、自分の部屋。清涼学園で寮に入ってから、たまに帰つて来ているが、あえて部屋を変えてない。

最後に来た時から、まだ一ヶ月なものにな。

本当に、懐かしい。

きっかけがあれば、昔の事も思い出せるんだな、柴田、山陰、朝道、桑原。

思つたより、思い出せた。

夜、俺は明日がどうなるか、と考えた。明日は女になるからだ、家族は一応知っているが、それでも現実として来るのは重たいだろう。それでも、家族揃つた晩ご飯は、とつてもうまかった。

つまり、ユーザーでんういく？ 1ページ（後書き）

お気に入り登録数も増えて、嬉しいです。
初めての小説でこんなになると思ってませんでした。

つまり、フーでんづーく？ 2ページ（前書き）

小説執筆場所は主に布団の上です。ふつかふかでないのが残念です

つまり、じーるでんうーく？ 2 ページ

目が覚めた。

俺は思いっきり伸びをし、手櫛で髪を撫でる。それから俺は階段を降りた。そして、

「うわっ！」

驚いた。なんてったって家族揃ってソファーに座り、皆一様にこちらを見ていたからである。

「何してんの？」

たまらず俺は聞いた。だって不思議なんだもん。

「ふむ、これが女の子になった猛か」

父さんが顎に手を当てて言う。しかしその姿は、全く渋く無く、ただの太り気味のおっさんだ。

「これが兄ちゃん？すっごく可愛い顔してるよ」

おい翔、俺は性格もいいだろうが。

「本当に……本当なのね」

母さんだけがまともなのか、未だに信じられないのだろう。ところがすぐに、

「でも、なんで服は変わらないの？やっぱり戦隊物とかの変身とは違うのかしら」

目で見た物は全て信じ、ヒーロー物のドラマを見ている母親に戻った。ホント色々変わらないな。

「猛。もしかしてあんた、学校でも男物着てるんじゃないでしょうね」

そんな質問朝からするのか。

「まあ、制服以外はそうだな」

俺がそう答えた瞬間、うちの母親は顔を輝かし、ソファーに座っている面子に命令する。

「お父さん車だして、こうゆーのはさっさとやった方がいいわ、猛

はさつさと朝ご飯食べて、久しぶりの家だからって、昼まで寝てないで頂戴。翔。ついでにあんたの服も見に行きましょ、みんな早く準備して！……さてと、ポイントカードどこやったかしら」

ともまあ、急に慌ただしく家族が動いた。

「ところで、母さん。車を出すって何処に行くんだ？」

父さんが聞くと、

「この娘の服を見に行くの！」

母さんは俺を指差して言った。

やや大きめのショッピングモールで、神鎌家の母親はウキウキしながら服を選んでいる。

今まで家に女の子がいなかったから嬉しいのだろうが、歳考える四十後半。

「今日お母ちゃんどうしたの？」

翔が聞いて来る。俺は

「暴走してんだよ。」

と言っておいた。すると母さんがこっちに手を振っている。俺を呼んでるらしい。

俺が近づくと

「とりあえず、これとコレとこれとコレを試着室で着て」

と、かなりの量の服を渡されて試着室に押し込まれた。普段ならあり得ない早業に、俺は呆氣に取られた。

「ほら、早くして」

急かすのが早い！

じゃなくて、この服はどうやって着るんだ？俺は色々迷った末、なる様になれと適当に着た。その後母さんに怒られて、服を変える度

に注意され、着方を直し、また新しい服を渡されてと言う行動が、ずっと続いた。

「はあ……」

ベンチに座り、俺は溜息をついた。

足下には、色んな服が入ってる紙袋がある。

女になるのは一日起きなので、そんな量はいらないと思ったので、服を色々削ったが、

紙袋はとても重たい。

母さんは、いま翔の服を見ている。翔はまた服が小さくなったらしい。俺はここ数年、服がきつくなっただと感じただろうか？

「猛、お前やつぱり、明日学校に戻るのか？」

不意に父さんが聞いて来た。

俺はああ、と答えた。

ほんの少し、父子で話した。懐かしい話だ。

「後、時間的に門限間に合いそうにないんだよね」

柱時計を見ながら俺はつぶやいた。母さんはまだ翔の服を見てる、

「母さんには、俺から後で言うておくよ。まだ間に合うんだろ？」

父さんが言った。

俺は立ち上がって

「正月：最低でも正月には、帰れるから」

そう言っ、紙袋を持って学校に帰った。

ショッピングモールで、しかも父さんにしかきちんと別れを言えなかったが、また集まれるから、気にしなかった。

つまり、こーでんうーく？ 2ページ（後書き）

二度寝の心地良さはやっぱり半端無いですね
さて、次回は、たしなみでしょうが
お楽しみ、に。

つまり、ジョーでんうーく？ 3ページ（前書き）

実はこのゴールデンウィークが終わると、なんにもネタがない状態になります。

今一生懸命探しています、ネタ。

つまり、こーるでんういーく？

3ページ

「っと、おーい帰って来たぞー」

俺はなんとか門限に間に合い、寮に帰って来た。部屋が暗かったから、燕は寝ているのだろう。俺は中に入って持ち物を軽く整理し、ベットに向かった。そして疲れも手助けしてか、簡単に眠りについた。

次の日、

俺は朝早くに目が覚めた。

ゴールデンウィークは、休みが五日間だが、その間の宿題の量は半端じゃない。

とても五日で終わる量じゃないから、それをかたずけないとな。

そう思っただけでベットから降りると、燕の顔が目についた。そして、ベットに広がる髪を見て

ガッ！

「ったあ！」

殴り起こした。

「ったいなあ、なにすんだよ」

頭をさすり、涙目になって燕が言う。

「こつちが聞きたい。その頭はどうしてそんなになってるのかと」

俺は燕の髪を見た。所々ゴワゴワしていて、毛先に行く程酷くなっている。多分面倒くさがって適当にやったんだろう。切らないのは、他の四人に言われたからだ。きっと。

「頭？別に普通だろ？」

なにも知らないでそう言う燕の頭を、俺は掴んで洗面所まで引っ張った。

「お前も学校で色々語ってたろ、髪は長くて綺麗なのが良いつて、だのに、なんだこの痛み切ったこの髪は」

確か四日ぐらい前は綺麗に背中に降りていた。元の髪質は良い方なはずだ。

「いや、なんかグチャーってなるし、今休みだからさ」

今はパソコンがあるのに、こいつは怠けたのか。

「洗い方教えるから、頭出せ。」

洗面台に首を出させ、上からシャワーをかける。解りにくいなら、頑張ってくれ。

風呂場から取って来たシャンプーで、燕の髪を洗う。風呂に抵抗でもあったのだろう。結構汚れている。シャンプーを二度がけして、リンスをする。インターネットと実体験で学んだ事を思い出してやった。

終わったら、ドライヤーでしっかりと乾かし、その後燕に洗い方を説明した。みっちり。

「あー宿題やつとこうと思ったんだがなあ」

俺はふーっと息を出しながら言った。

「ところでさつきから気になったいたんだが、あれはなんなんだ？」
燕が指さした方向には、俺が昨日おいて置いた紙袋。

「ああ、昨日家族と買い物に行って買った服だよ。見てみるか？」

俺がそう聞くと、燕は頷いたので、俺は紙袋を手にとって、中の物を取り出した。

「これ……女物？」

中から出て来た服に、燕は戸惑ってるのだろうか。目を丸くしている。

「別におかしくないだろ。まあ今日は男だしな。燕、お前きてみるか」

俺は手元にあった肩の出るタイプのシャツを見せた。燕はふるふると首を振る。

「これは？」

次は普通のTシャツとスカート。燕はこれならと思ったらしい。ゆっくりと頷いた。

燕に服を渡して、着替えてる間に服の整理をした。そのとき燕が胸の部分を抑えて

「……………キツイ」

とつぶやいた。ああキツイんですかいキツショウ。

「ふーん、中々、いやかなり似合ってるな」

女物を着ている燕を見て、和樹が言った。

「確かに映えてるな」

修も賛同している。

俺は宿題を片付けている。

燕は、慣れないスカートが気になってる様だ。

「よし！私服が手に入ったなら明日ゴールデンウィーク最終日、遊びに行くぞ！」

飾はそう言った。

俺は、数学の文章題にてこずっていた。

つまり、じーでんうーく？

3ページ（後書き）

女になって、とくられる話が一通り終わると、後は普通の学園物になりますね。

何か工夫出来ればいいです。

さあ、次回は、無駄？

つまり、こーるでんうーく？ 4ページ

遊びに行くと言われた。

言った本人は、すごい事を思い付いた子供の様な笑みを浮かべている。

俺らはと言うと、突然の大声に何事かと驚いて固まっていた。

「遊びに行く？明日？」

修が和樹に聞いた。和樹は笑みを崩すことなく

「ああ、明日だ」

普通に返した。修が反応出来てない。

俺は宿題をしていた手を止めて、和樹に聞いた。

「遊びに行くって何処に行くんだよ、そしてなんで遊びに行こうと思っただ？」

和樹は俺の方を向いて

「何処かは後で決める」

と言った。決めてないのかよ。

「なぜ明日遊びに行こうと思ったか？それは簡単。お前らが女物の私服を買ってきたからだ！」

でーんと言う効果音が付きそうな宣言に、俺らはただ呆れていた。

「この服、たけ…かかりのなんだけど…」

燕が服を弄りながら言う。

「確かにこの服は俺の物で燕のサイズに合ってるのは無いぞ」

俺は和樹にそう言った。

「大丈夫だって。着れてるじゃん」

いやそう言う問題じゃねえよ。

燕が着ている俺のシャツにプリントされているウサギさんがすごい事になってるのに気づかないのか？

「で、遊ぶ場所はどうするんだ？」

優太がソファから聞いた。ここは俺らの部屋だ。一応。

「それなんだが猛。お前女になつてやりたい事とか無いのか？」

質問を言ったのは優太のはずなんだが、和樹は俺に言ってきた。燕が何故か恥ずかしそうにしていたのが気になったが今は関係ない。

「そうだなあ。あんましないけど、強いて言えばカラオケで高音の歌を歌う事かな」

俺が答えると一瞬妙な空気になった。しかしその後には

「まあ、考えてみたらそれも女になつてやりたい事ではあるな」

「よし！じゃあ明日カラオケで盛り上がるうぜ」

パーティーの様な盛り上がりを見せたので有った。そのパーティーは夜まで続き、俺らは寮母さんに怒られた。

「起きろ。服どうすんだよ。まだ決めてないぞ」

次の日、俺は燕にゆさゆさと起こされた。

「朝から服決めか？お前段々変わつて来たな」
起こされて少し不機嫌な俺は燕に言った。

「な…変わつてないよ…てか、まだ二週間だからな？」
スルーする訳でもなく、突っ込んで来る訳でもなく、真面目に返された。

どうすれば良いのかわからない俺はとりあえず起きる事にした。

たった十着程度の服を選ぶのには、そう時間がかからなかった。だって、俺も燕も、まだ女物の服に慣れていないからだ。

服を決めて、食事を取っていると、飾達が来た。

「もうちよつと可愛い服なかったのか？」

俺らの格好を見るなり飾が言った。

「残念ながらこれが限界だ」

俺らの格好は、はつきり言つて男物に近い。

まだスカートに慣れたワケじゃないし、街中で着るのには抵抗がある。

だから、シンプルな感じになっている。

「まあ気にしないでカラオケ行こうぜ。昼のフリータイムに間に合わなくなったら大変だ」

優太が腕時計を見ながら言った。フリータイムに間に合わなくなったら、金がかかる……俺らは急いでカラオケに向かった。

カラオケは、別に大きな店ではなかったが、別に普通に楽しめた。高音キーの歌を歌いたかったが、残念な事に曲が分からないのだ。アニメのオープニング曲などを歌おうとしたが、一番と二番でメロディが違うと大変な事になった。半端な感じになってしまったのがなんか辛い。

そんなこんなでゴールデンウィークは過ぎて行った。

つまり、こーるでんうーく？ 4ページ（後書き）

勢いで書いたり、考えて書いたり、自分の中でも書き方って違うんですね。

次回、季節というもの。
お楽しみ。

「はい、ではこれでよろしいですね？」

昨日まで降っていた雨も上がり、まだ所々に水たまりがあるが、それでも久し振りに良い天気だ。すっかり緑になった桜も、太陽の光を浴びて生き生きしてる様に見える。

「はい、ありがとうございます。」

気温が高くなって来たが、まだまだ暑くは無い。それよりは、湿気が気になって来る。

「おい、燕、届いたよ」

俺は今受け取った荷物をリビングに運んで、燕を呼んだ。すると風呂の方から燕が濡れ髪を拭きながら出てきた。

「届いたって、何が？」

燕が髪を拭きながら聞く。俺は届いた荷物を解いて、燕に見せるように蓋を開けた。

「夏服。」

今は、六月だ。

「へえ夏服かあ。もう届くんだね。ところで、箱が三つあるのは？」

燕が箱を覗き込みながら言った。リビングにおいてある箱は、燕の言うとうり三つある。

「俺のと私のとお前のだと思うよ」

ゴールデンウィークから現在までの約一ヶ月。普通に日常は進んでいた。そりゃ、学校の方で色々あったりしたが、大したじゃない。

大した事と言えば…

「じゃあさ、取り敢えず着てみよう。サイズ合わせてあるかどうか確かめるよ」

「その前にお前変わっておいた方が良い」

この身体、実は自分の意思で男でいるか女でいるかが決められた。ただ徹夜した時は相変わらず変わる事が出来なかった。では徹夜しなければほとんど男ですごせるかというところではなくて、どうやら男で過ごした時間と女で過ごした時間のバランスらしいのだが、詳しくは分からないでいる。

取り敢えず俺は女の体だ。

シャツも半袖になると雰囲気違うなあと思っていた時だった。

「おーいお前ら元気してるうー？」

和樹がドアを開けて飛び込んできた。

俺らは夏服に着替えてる最中で、その格好は――

「やあああああああ？」

俺の横で悲鳴が上がり、俺は部屋にやって来た男子に向かって拳を勢いよくぶつけた。

「なにもここまで……」

普段着に着替えた俺らの横で、和樹が倒れている。修は、和樹のほうをチラッと見ながら言った。

「しょうがないだろ？ 着替えの最中にいきなり入ってこられたら、元男子でも動揺するよ」

燕は下を見ながら言った。

俺は考えたら手を出す理由が思いつかなかった。反射的に不届者を殴っていた。

だがこの不届者も悪いワケで、気にしないでおう。

「でももう夏かぁーまだ四月に感じるな」

修が麦茶を眺めて言う。氷の入って無いコップの中で、麦茶は残り半分くらいだろう。その残りを一気に飲み干して、

「そっぴいやお前らテストどうだった？」

ぶらつきぼくに嫌々なことを言った。

「お前、なんで今そんなことを……」

修を見ると、悪気がなさそうな顔をしている。そう、なさそうな顔だ。

実際あの状況でテストの結果が良いやつはいない。突然自分が女になって、そしたら今度は友人を女にして、家族に説明しに行ったら女物の服を買い、一段落と思ったら本当は自分の意思で身体を変えられますってなって、テストで良い成績なんか無理と言っものだ。俺が愚痴っていると、燕が

「何言ってるの、お前結果貼り出された時ちゃんと名前書かれてたじゃん」

睨んで来た。

「でも二十点落としてんだよな」

「普通あり得ない事が起こったのにちゃっかり勉強して、二十点しか落とさないやつはいないとおもう」

睨み続ける燕を無視して、俺は夕飯の準備に取り掛かる。

不思議と落ち着く、ただの日常だ。

つまり、落ち着きました 1ページ（後書き）

段々文章力がなくなっている気がします。
何とか立て直したいです。

外は、雨が降っている。

昨日あんなに晴れていたのに、外は雨だ。

嬉しいのは、傘もさせない土砂降りでなく、傘をさそうかどうかどうしようか迷う霧雨でも無い、雨らしい、静かな雨であることだ。

俺は大きく息を吸って目を閉じる。しばらくすると、ほんの一瞬、体の感覚が消える。そして目を開ければ鏡の中に、男の俺がいる。

自分の意思で変わるときは、落ち着いた状態出ないといけない。だからだろうか、最近、何事も動じなくなった。

「いや、元々だと思っよ」

いつの間にか燕が後ろに居た。湿気を散々吸ったようで、髪が所々跳ねている。

「雨なんか嫌いだ」

寝癖を直しながら燕がぶーたれる。

「知らないな、俺は。」

「お前も寝癖直しの大変さを知っておけよ」

「女の時は髪質が凄いから、寝癖が出来ない」

「ずるくないその髪？」

「雨は別にいいんだけど、ズボンの下が濡れるんだよな」
今度は和樹がぶーたれている。

傘をさしての登校。あじさいではないが、道の横にある草木が綺麗に見える。

女の時にこの状態で傘なんか回したら、結構絵になるんじゃないかな。自惚れか。

「暑いのがこの後来るんだもん。涼しいって気分、今のうちに味わっとかないと」

飾はそう言って傘を思いっきり回した。

「なっ、いきなり回すな！水がかかったじゃねえか！」

飾の横に居た修が飾を睨む。二人のさしている紺と茶の傘が、俺の前で閉じたり開いたり回ったり、どうやら水のかけあいをしている様だが、お前らいくつだよ。

そうしてるうちに、学校についた。

「ここに来る度に思う。なんで俺だけ取りにくい場所なんだろうな」
下駄箱を俺は恨めしく眺めた。

「普通は最上段でも取れるぞ、お前の背が低いだけだ」

優太にそう言われたが、必死に上履きを取っている俺には聞こえない。

教室。学校と言うのは案外暇でホームルームが始まる前ぐらいしか面白い事がない。

そのホームルームが始まる前、俺は携帯を見ていた。

「ん。今日の占いか…」

検索エンジンのサイトの、エンターテイメントコーナーの、占いと言う文字が目についた。

「占い？面白そうだな。ちょっと見てみようぜ」

飾が後ろから言ってきた。人の携帯を後ろで覗き見るのはマナー違反だろう。

「おい早く開けよ」

飾にせかされて俺は占いページを開く。えーっと、射手座は……

「五位か」

半分より上だが、微妙な順位だな。

「占い？どれ……うっ十位」

燕が後ろから言ってきた。こいつらマナーがほんとになってないな。

「飾、牡羊座最下位だぞ。」

「……………知ってるよ」

割とこういうのは気にする方なのか？

飾はおいて置いて、俺は射手座の詳しい結果をみた。そこには、思っても見ない事が起こるよ、と書かれていた。思っても見ない事は、二ヶ月前に起こったよ。

つまり、落ち着きました。

2ページ（後書き）

何故か第七話がこの話で人気です。
どうしてか解りません。

つまり、落ち着きました。 3 ページ

学校が終わると、俺らは自然と集まって、帰る事になる。

下駄箱からでたところで、俺は空を見上げた。

「だいぶ雨弱くなったなあ。まだ降ってるけど」

そう言つて傘を差そうとした時だった。突然、どこから飛んできたのかボールが俺の頭に直撃したのだ。

「ぐあつ！」

バランスを崩した俺はそのまま倒れ、目の前に合つた水たまりにダイブした。

「おい猛。大丈夫か？」

修が顔を覗き込んでいる。

「なんとかな…」

俺はそう言つて笑顔を作つて見せた。

「おい、お前らボール投げんなー」

飾が下駄箱の中に向かって言つた。どうやら廊下でボールを投げ合つてた様だ。

「飾。お前もボールを投げんな」

優太が飾を注意した。

「猛、お前制服凄い事になつてんな」

水たまりにダイブしたんだ、汚れて当然だろう。だがここまで見事に汚れるとはな。

「こりゃクリーニングしなきゃってレベルだろ」

修が俺の服を見て言つた。俺は、朝見た占いを思い出していた。確かに、思つても見ない事が起こつた。

次の日。

男物の制服をクリーニングに出しているので、必然的に俺は今女になっ
ていて、女子制服を着ている。

「全く、今日も雨とはね」

燕が横でばやいてる。傘をさし、静かに雨の音を聞いていれば、雨も
それ程嫌じゃないと思うのだが…

俺がそう言つと、

「歩きにくいの嫌なんだよ」

と燕が言った。最初はよく分からなかったが、歩いていると、ひざや
ふくらはぎあたりに水がかかってきた。靴についた水が、足を上げた時に
飛んで、そのままひざにぶつかって来ている。

「何、これ？」

不快になって来た俺は燕に聞いた。

「男の制服はズボンだからな。気が付かなかったんだと思う」

この答えに、俺は納得した。

「女の子と歩き方もやっぱ違うんだね」

「確かに、小さな事が違うんだもんな」

青と赤の傘の中で、俺達は呟いた。

「猛、どうしたの？」

一人の男子が話しかける。教室で、俺は周りに注目されていたらし

い。

「猛さ、昨日制服汚れてその事で色々やって疲れたみたい。しょうがない事だから、そつとしておいて」

なんで注目されていたか？それはその時、真ん中の列後ろから三番目の席の奴、つまり俺が眠っていたからだ。

説明になるかは分らないが、俺の体が変わる時は、基本寝る時である（最近は自分の意思で変わっているが）。そして俺は今日、女子制服で登校している。学校について疲れて寝てしまったら、つまりそつ言う事である。

そうして俺が眠っていた時に、一人の生徒がやって来た。

「このクラスに、女子生徒がいるそうじゃないか！」

つまり、落ち着きました。 3ページ（後書き）

総合PVが15000、総合ユニークが2500！
テスト期間だったのに、泣けて来ました。

つまり、落ち着きました。 4ページ

朝のホームルームも始まっていないのに、疲れた体を休める事なく、俺は叩き起こされた。

眠い目をこすり、周りを見ると、俺が起こされた原因であろう人物が目についた。

原因と思った理由は、中の上に入るであろうその顔が、見ているだけで腹が立つ笑顔をこちらに向けていたからである。

俺は立ち上がるとその前の前に立って――

「君かい？このクラスでおぶうつ！」

鉄拳を顔に叩き入れた。殴られた男は、そのまま仰向けに吹っ飛ぶ。「おいかか・・・猛！いきなり殴るなよ」

飾が言った。倒された男は、周りに起こしてもらっている。

「なんかつい・・・」

俺は頭をかいた

「とりあえず、起きたんなら女になっとけ。変だから」

飾に言われて俺ははっとした。それはやばいな。

「ええっと、大丈夫ですか？」

燕が俺が殴った男に聞いた。男は相変わらず腹が立つ笑顔だ。

「大丈夫だよ。それより二人に、お願いがあるんだけど・・・」

男が笑顔のまま言った。こいつが最初に言った”このクラスに女子がいる”って言葉から、俺と燕に用があるようだ。

「お願い？」

「そつだ。君たち、美術部まで来てくれるかい？」

「嫌だ」

男が顔をあげたまま言ったのが気に食わなかったので、俺は即答で答えた。すると燕が

「お前顔殴っちゃったんだから、拒否するな」

なんて言ってきた。お前いつか後悔すんぞ。

ただ、殴ってしまったことは事実で、殴った理由も起こされたからでは、明らかにこちらが悪い。

少し考えて、俺は言った。

「どうして美術部に行くんだ？教えてくれ」

お願いを一瞬で拒否された事にダメージがあつたのか、男はしばらくボーっとしていたが、何回か声をかけると元氣を取り戻して

「それは君たちにえのモデルになつてもらいたいからさ！」

拳をグツと握つて言った。

「えっ？モデル？」

燕が驚いている。俺はさらに質問した。

「そのモデルつてのは、なんの絵のモデルだ？」

「申し遅れた。僕は佐久間修一だ」

俺の質問を無視し、この男、佐久間が言った。

「僕が君たちにお願ひしたのは、今日の朝にビビーときたからさ。雨がしんと降る中で、君たちを見つけた。僕は驚いたよ。傘を持って雨の中を歩いているだけなのに、心に来るものがあつたんだから！でも何か足りない。僕はそう思った。そしてきずいたのさ！あれでさらに手前にアジサイがあつたなら、素晴らしいものになると！だがこの学校にはアジサイがない。けれど大丈夫！僕が所属している美術部の部員たちなら、君たちをモデルに最高の絵を描いてくれるから！」

非常にながつたるしい文章を語つてくれた佐久間少年は、そう言つて俺らの腕を掴んで歩きだした。

「ふわっ！」

俺と燕は、突然引つ張られてよろけるが、佐久間少年はお構いなしだ。

まあ、あの話では、変なこともないだろうが。

どうでもいいが、俺と燕の腕をつかみ、強引に連れ歩いているこの佐久間少年に、鉄拳を与えてもいいのだろうか？

つまり、落ち着きました。 4 ページ（後書き）

実はゴールデンウィークと今回の話は、当初物語にありませんでした。

でも最初の形で進めると四月の後、七月に…

つまり、落ち着きました。 5ページ

引きずられる様にして、俺らは、美術部部室の前にきた。

「ちよつと待ってておくれよ」

佐久間少年がそう言つて部屋の中に入つて行つた。

しばらくして、佐久間少年が部屋から出てきた。

「入ってくれ」

力が抜けた様な声で言つた。中で一体何があつたのだろうか。

俺らが中に入った。中は結構明るくて、清潔感があつて、それでいて何か落ち着くものがあつた。

そしてその中に、優しそうな顔をした人がいた。男の人なんだが、まどつてる雰囲気は母性的な物がある。ネクタイの色を見る限り、二年生だろうか？

「君たちが最近噂の女の子たちかい？」

優しい顔から発せられた声は、とても優しいものだった。これだけで、たいていの人なら心を許してしまいそうだ。

「しかしよく来てくれたね。佐久間君、すこしおかしなところがあるから」

少しをすつごくに頭の中で変換して、俺はうなずいた。俺らの後ろで「芸術家は少しおかしいくらいがいいんだ」とか聞こえてるが、無視。

「僕は森山^{もりやま}大地^{だいち}。この美術部の部長だ」

森山さんが言つた。この人が部長なら、美術部員は幸せだろう。

「部長さんなんですか?!」

燕が驚いて聞いた。今日コイツ驚いてばっかな気がする。

「ああ、こんな僕だが、部長をさせてもらっている。ところで、お願いの中身は知っているのか？」

「あつ、はい。確か絵のモデルって……」

「そうか、知っているなら話は早いね。放課後、美術室^{びいじつしつ}に来てくれ

るかい？」

森山さんがそう言ったのを聞いて、俺は朝のホームルームが始まる前だった事を思い出した。

放課後、俺らは、言われたとうりに美術室に来ていた。俺と燕はモデルをするため、他の四人は冷やかしの為にいる。

朝と違って、部室には結構な人がいて、俺らの方を見てヒソヒソ言い合ったりしている。

「や、遅くなった。悪いね」

ふと後ろから優しい声がしたと思ったら、森山さんがいた。

「森山部長。こんにちは」

あちこちから声が聞こえて、この人はやっぱり人望があるなと思った。

「それじゃ、え〜っと…」

「あつ、神鎌^{かみかま} たけ… かかりです」

「神鎌さん。あと…」

「山瀬 燕です」

「山瀬さん。傘を持って、庭園のどこにいてくれるかい？ ああ佐久間君。雨降ってるから道具を、後、篠田^{しのだ}も、準備を手伝ってくれ」
「テキパキ指示を出す森山さん。佐久間少年と篠田とよばれた人が、立ち上がって何やら大きなセットを持ち出す。」

「手伝います」

冷やかしの連中も手伝いに行った。

「俺らも庭園に行こう」

俺がそう言つと、燕は頷いた。

つまり、落ち着きました。 5ページ（後書き）

猛達以外のキャラ（先生達を除いて）実は作中で十一月頃にやっと登場する予定でした。

でも彼らだけでは、つまらなくなってしまうそうです。

次回。筆を取って

お楽しみにー

つまり、落ち着きました。 6ページ

清涼学園には、男子校にも関わらず、様々な設備がある。庭園ガーデンもその一つだ。

学園の一角にあるこの庭園は、生徒の憩いの場所として作られた。季節によって違う花が植えられていて、年間で三百種以上植えていくとか。

まあ、花を見に来る生徒なんて、選択で理科を取ってる奴ぐらいだけだな。

「あの人達、凄いな」

「ああ、何してんだか分からないけどな」

傘を持って、雨の中庭園の入り口に立って森山さんを待っていた俺と燕は、雨に打たれながら、大きなセットを運んでいる美術部員と冷やかし四人を見ていた。セットの横で指示を出していた森山さんは、俺達に気がつく

「やあ、待たせたね」

と言って来た。真顔で。

「大丈夫ですよ。ところで、あの大きな物はなんですか？」

俺は森山さんの後ろのセットを指さした。

「ああ、あれは画材が雨に濡れない様にする為の物さ」

森山さんが答えると、今度は燕が言った。

「部員は思いつきり濡れてますけど…」

「大丈夫！素晴らしい絵が書けるなら、多少濡れたって構わないさ！」

笑顔で言う森山さん。かつこいいな。

その後ろで和樹達が、俺等は構うと視線を送っているが、無視だ。

「さあ、早く準備しよう。雨が上がったらもつたいないからね」

しばらくして、俺と燕の前に大きなセットが立てられた。はつきり言ってキャンプなどで使うタープで、その中に森山さんと美術部員が画材を組み立てている。

組み立て終わると、森山さんがこっちをみて、

「ええと、こんな感じで傘を持って」

と、ジェスチャーしながら言った。俺は森山さんがした様に、傘を両手で持つ。肩に傘を当てながら、右手で支えて、左手は添える様に。

「そう。そんな感じで、向きはもうちょっと右向きだな…そう。そんな感じ。山瀬さんは、こうやって、それで神鎌さんの横に行つてそこ！そこに立つて」

森山さんの指示に従つて、俺等は動いた。

「神鎌さんは、こっちをみて、不思議な物を見る感じで、…うん、少し首動かしてくれる？…うん。それが良いな。そのままでいてね。山瀬さんは、神鎌さんの方を向いて、笑顔で、よし！じゃあ二人とも動かないでね」

まさか表情まで指摘されるとは、俺達が表情を勘でやってると、満足した様にうなずいて絵を書き始める森山さん。その後ろでこっちをみて笑いを堪^{こら}えてる飾^{かざり}達。正直、殴りたい。

そこから長い事俺と燕は動かなかった。いや、動けなかった。森山さんがいきいきと筆を走らせているのを見ると、動こうにも気が引けてしまう。そんな光景を見続けたとき、

「出来たっ！」

森山さんが言った。

ようやく、ようやく終わった。

フーッと息を吐き、体を動かす。あちこちの筋肉が固まった気がする。

「凄く疲れたね。帰ってお風呂に入りたい」

燕の意見に俺は同意した。ただ立ってるだけがこんなにも疲れるとはな。

「仕上げを終えたら、君達にも見せてあげるよ」
森山さんが笑顔で言った。本当に満足行く物がかけたのだろう。その顔は輝いていた。

「これが完成した絵ですか？」

数日後、俺達は、美術室に来ていた。

「凄いなあ」

修が感心している。まあ、その気持ちは分かるな。この絵は凄い。

雨が降っているなかで傘を差した女の子が二人。その子達の手前にあるアジサイが、大きく、美しく描かれている。

俺達はその絵を、しばらく見ていた。

つまり、落ち着きました。 6 ページ（後書き）

読んでくれた方、読み続けてくださっている方、お気に入りにして
くれた方、評価してくださった方、感想をくださった方に、世界規模の感謝を。

窓の外で、セミがとてもやかましくなっている。何故そんなに元気なのかは知らないし、とても夏らしいのだが、うるさすぎる。

しかし室内ではそんな事関係なく、俺等は学校の準備だ。…まあ、準備なんてほとんどないがな。

「っし、今日を乗り切れば夏休みだ!」

空高く、明るく燃える太陽に向かって、学生は喜びの声をあげる。

「夏休みはやっぱし遊ぶだろ。海行こうぜ海」

飾が鞆を振り回しながら言う。何も入って無いかばんは、とても軽い。

「あぶねえな。でも海は良いな。なんてったって」

「「せっかく女子がいるんだもん!」」

飾と和樹がハモる。太陽にあてられておかしくなったらしい。

「お前ら…まあ、海は良いな。他にも色んなところ行って、忙しく遊ぼうぜ」

忙しく遊ぶってどんな意味だよ。優太。

まあ、せっかくの夏休みだしな。遊ばなきゃそんだ。

「宿題。終わっかな?」

そんななか、修は宿題の事を考える。

「とにかく夏休みだ!どうすごすか、考えようぜ!」

俺達は腕を勢い良く突き上げた。

「やっぱり夏と言ったら海だろ」

和樹が真顔で言った。

「それと山だな。」

優太も真顔で言う。

「電車で田舎の方に行くつてもありだな」
修ですら真顔で言う。流行ってんのか？

「祭りに浴衣ゆかたつてのは、良いと思うんだ。」

飾も真顔だ。本気で流行っているらしい。

「虫取りとかまたやりたいな」

しかし、燕は目を細めて遠くを見る目で言った。これが限度か。

アイディアは、結構出る物だ。次にこれを、いつ行うかを決めなくてはならない。

「じゃあいつ行くかだな」

「海は早めに行こうぜ」

「山は普通に八月半ばで」

「お祭りは七月の最後にやる学校のやつで良いな」

「虫取りは山のついでに」

「旅行は断念って事でいこうか」

などと会議をしていくうちに、海に行くとしてもどこの海に行くか、どこの山に行くか、どの位行くかなどが決まっていく。

「海は三つ電車使ったあそこで、後、一泊する。これでいいな？」

「……おーけー！」「……」

夏休み第一回レクリエーションは、海に行く事になった。

つまり、…………夏か 1ページ（後書き）

今回は短くなってしまいました。

書くのはほんとと難しい。

さあ次回は、海ですよ？

おたのしみに

電車の中から見る景色は、町の中で、大きなショッピングモールがあったり、散歩しているひとがいたり、中々に面白い。ガタンゴトンと揺れるリズムが、座っていると心地よい。車内に人は結構いるが、今は休みだからだろう。エアコンのおかげで暑くないので、とてもいい気分だ。

「おっ！おいほらお前ら！見えたぞ。海だ！」

優太が外を指差す、建物の奥の方に、海が見えて来た。

「おおっ！」

思わず声が漏れた。

海に太陽の光が反射して、眩しい。俺達は、窓に近いて、海を見ていた。

駅について、ホテルに行つて、色々と用事を済ませた俺達の目の前に、綺麗な海がある。

「なあ」

そんな時でも、こいつらの思考はいつもと同じだ。

「なんでお前、男なんだよ？」

こんな風にな。

「前夜祭とか言つて徹夜したからだろう？明日には変わる様になるけど、今日は諦める」

俺は笑顔でそう言った。がつくり肩を落とす和樹。俺は言葉を続けた。

「それに、62って言われた俺なんかより、78のあいつの方が目に良いだろ？なっそのかノジョ」

そう言つて俺は少し離れたところにいる燕を見た。パラソルの下で日焼け止めを塗っている燕は、少し恥ずかしそうにこちらを睨んでいる。

「どこのチャラ男だよ」

修が後ろで呟いた。

「お前らいつまで浜辺にいるつもりだ？さっさと泳ぎに行くぞ」

声のした方を見ると、優太が立っていた。と思つたら、優太はそのまま修と飾の腕を掴み、海に一直線に走っていった。俺等は笑つて後を追つた。

海はやはり、とても楽しい。

気がついたら、夕方になっていた。

俺達はホテルに戻り、落ち着いている。

部屋は二つ取っているが、俺達は今一つの部屋に集まっている。

流石は私立に四年も通っている家柄だよな。ホテルで割り勘とは言え部屋を二つ取るのだから。

「海、明日も泳がないと」

そんな事を燕が呟いた。

「せっかく海に来たのに泳がないとか、そんなもつたない事はしたくないな」

俺も賛同した。今日泳いでいるが、それが明日泳がない理由にならない。

「じゃあ明日は岩場の方に行こうぜ」

飾が言つた。視線は手に持つてるものに集中していて、なにか考えている。

「そついや洞窟みたいに穴空いてたな、あそこの岩場。つとウノだ」

「はいドロー2」

「大丈夫、俺は持つてたからな」

「ドロー2」

「続くね、ドロー2」

「よかつた持つてたよ。ドロー2」

「……………」

固まる優太。

「どした？早く十枚引けよ」

ウノを宣言した直後に、誰よりもカード数が多くなって、ダメージを受けた様だ。少し放心状態になってる。

その後、カードを順調に減らして、俺は三位とまた微妙な順位で終わった。

因みにビリは修で、本人は納得いかずに再戦を希望した。

「続きは風呂の後な」

そうして俺達は、高らかに笑いながら部屋を出た。

夜はこうして更けて行く。

つまり、……………夏か 2ページ（後書き）

第一回レクリエーションはっとか言っ
て起きながらポンポン飛ばす
から人気落ちたのかな

……………反省。

朝目が覚めれば、それはいつもと変わらない朝で、セミの大合唱が夏らしいBGMとして聞こえる。朝日がとても眩しく、時計を見るとまだ六時頃で、起きようか二度寝しようか悩んでしまう。とりあえず皆が起きるまでじっとしてようかと考えていた時だった。

「かゝかりちゃん。つゝばめちゃん。おゝきーてゝ。」

……………近所の小学生だろうか？

「俺は小学生じゃないぞゝ？」

なんだ？俺はテレパシーを使った覚えはないぞ？俺は声を無視する事にした。

「起きなきゃピッキングしてお前らの寝顔にチュウするぞゝ」

この言葉で俺は勢いよく跳ね起き、玄関に向かった。そして玄関にいた燕と共に扉を開け、そこにいた顔に二人で拳を叩き込んだ。

「何するつもりだ！この阿呆？」

「全く、今日はお前らの浴衣を買いに行くって言ってたじゃねえか」
頭をかく修。その横で、完全に伸びている和樹。

「あんな言葉を言われたら、思わず…ねえ？」

燕が顔を下に向けつつ言った。

俺も賛同する。男子校とは言え、あんな言葉を玄関の前で堂々言うなってもんだ。

「まあいい、とりあえず、九時に出かけるから、それまでに準備しておけよ。あとかかり、お前の服を買いに行くんだから、男になるなよ」

「おー」

そう言つて修は、和樹を引きずつて部屋をでて行つた。

「…とりあえず、飯を作るか…。燕、お前シャワー浴びて来いよ、寝癖やばいし」

「え？…ああ、そうする」

そう言つて燕は風呂場へと消えてつた。

俺は朝飯を作り始めた。朝飯は適当にご飯と味噌汁。シンプルな朝飯だ。

一応ここで説明。

今現在俺達は清涼学園の寮にいる。

海から帰つて来て十日ぐらい経つたから、いまは七月の終わり。この後、学園主催の文化祭とは違ふお祭りが開かれる。学園祭は生徒が出しものを出す、このお祭りは、近所のお店や住民の方が屋台などを出す。今日はこの後、お祭りで着る浴衣を買いに行くことになつている。

俺が味噌汁がうまくで来たかどうか、味見をしようとした時だった。

「…………… かり」

風呂場に入ってから何もしてないような気がしていた燕が、風呂場から声をかけて来た。

「ん？」

味見をしながら返事をする。すると

「なんか生理になつたみたい」

「ぶっ！」

爆弾発言が降つて来た。

つまり、……………夏か 3ページ（後書き）

テストが終わった開放感！
ゲームをクリアした達成感！
自然と溢れる満足感！
気持ちがいい！

燕の言葉に、思わず味噌汁を吹いてしまった。慌てて口をぬぐい、燕に聞く

「えーっと、何になったって？」

俺は風呂場の方に目をやらながら聞いた。

「…だから……生理」

風呂場から声が帰ってくる。

俺はまだ事態を収集し切れていないが、指示を出した。

「とりあえず、上げれ」

そう言った後、俺は携帯を取り出し、相手が電話に出たのを確認してから言った。

「緊急事態発生」

今現在俺達は、寮の一室にいる。

「緊急事態って…確かにそうだが…」

集まった俺達は、先程起こった緊急事態について話している。

「でもこいつは女になって二ヶ月経ってんぞ。何で今さら…」

飾が不思議そうに言った。確かに、燕が女になったのはゴールデンウィークの少し前だから、今更って感じだな。

「とにかくこの現状を何とかしないと」

優太が言う。しかし、男子校に寮暮らしの俺達は、何一つ解決策が浮かばない。

「かかり、お前は今まで生理とか無かったのか？」

「無いよ」

和樹が俺に振って来たのを流した時、ふと俺は解決策が浮かんだ。

「そうだ！高梨先生だ！」

思い出そう。高梨先生は、四月に女になってすぐの頃、身体測定をしてくれた理科の先生だ。男子校にいる話し掛けやすい女性。おばさん先生じゃないから、相談するのにピッタリである。

「おおっ！確かにそれが良いな。この時期なら祭りの事で多分学校にいるだろうしな」

そうして俺達は、浴衣を買うのを延期して、学校に向かった。

「だからと言って、六人でくる事無いでしょうに」

高梨先生は呆れた顔をして言った。俺達は、高梨先生に相談しに来たのだ。

「まあいいわ、とりあえず燕さん。ここに残ってね。他の人たちはえーっと山田先生ーっ！この子達に祭りの準備を手伝わせてあげて下さい」

……ついてこなきゃ良かった。

燕以外の俺らは、山田先生に　そうか手伝ってくれるのか　と感心されながら、引きずられて行った。

「そこにテントを建ててくれ」

山田先生に指示されて、俺達は鉄の棒を持ち上げる。祭りの準備を生徒が手伝うなんて事が今まで無かったのか、力仕事が俺達にまわってくる。周りも組み立てている最中で、結構騒がしい。

「ふう……やっぱまだ準備中だな。組み立てかけの屋台とかがあちこちにある」

教員が使うテントを建て終え、周りを見ながら優太が言った。

「ホントだ、…あつてもあそこは完成してるよ」

「この祭りって、やぐら建てる意味あんのかね？」

なんて雑談を楽しんでいると、

「神鎌。高梨先生が呼んでたぞ」

後ろに小鳥遊先生がいた。小鳥遊先生は俺を見て、

「家庭科室で待っているそうだ」

と言った。俺は和樹達にその事を言っで、小鳥遊先生にお礼をいい。校舎のなかに入って行っった。

家庭科室に向かいながら、俺はどうして呼ばれたのだろうと考えた。生理についてなら、さっき燕と一緒に話を聞いている筈だ。それに家庭科室でと言うのは何故だろうか。

家庭科室の前についた俺は、少し息を整える様にして扉を開いた。

「失礼します。先生ー」

俺は言葉が止まった。家庭科室には高梨先生がいた。そして先生の横にどこにあったのか、浴衣を着て恥ずかしそうにこちらを向いている燕がいた。

「……………」

俺が固まっていると、燕は恥ずかしそうに俯いて

「変じゃないか？」

と言ってきた。

「いや、…驚く程似合ってる」

燕が着ている浴衣は、深い黒の色の生地、赤いラインが走っている。それでいて振袖のトコに白も入ってるから、まんま燕だ。

「これどこにあったんだよ？」

俺が聞くと、高梨先生が答えた。

「それね、なんでかこの学校にあったやつなの。さあ、貴女もあるから着てみましょう。ちよつと待ってね」

そう言つて奥の部屋に消える高梨先生。なんでかこの学校にあったやつって、不気味じゃね？そう思っていると、燕が耳打ちして来た。

「高梨先生少し怖くなった」

どーでもいい報告だ。

そうしてると高梨先生が布を持って帰ってきた。

「さあ、試着するから、着てる物全部脱ぎなさい！」

……………は？

俺は固まった。

「え？先生なんて？」

「着てる物全部脱いでつて言ったの。浴衣は素肌の上に着るものだから。さあ、自分で脱げないなら……………身ぐるみ剥ぐ事になるわよ」

そう言うやいなや、先生は俺の制服（念の為に言つが、今は女だ）に手をかけた。

「あの…先生？何を…」

「せいっ！」

「？」

「測定の時も思ってたけど、やっぱりね」

「服！服を！」

「あ、ごめん。っと」

「？、え？え？」

「やっぱり可愛いわぁ」

本の数秒で、俺は浴衣に着替えていた。高梨先生の変な特技を知ったな。確かに怖いや…。

俺が着ている浴衣は、よくある紺の生地に綺麗な花が描かれている物だ。

「……燕、どう？」

高梨先生の後ろに薔薇が見えた気がしたので、俺は燕に聞いた。

「うん。凄い似合ってる」

燕は笑顔で言った。……なんか恥ずかしいな。

「……………照れてる？」

「なっ！」

「照れてるのか、可愛いよく似合ってるよ」

「やめい！恥ずかしい」

「顔赤らめちゃってまあ」

俺達が妙にきやぴつてると、高梨先生が俺達に向かって言った。

「二人ともお祭りに出るんでしょう？その浴衣あげるわ」

「「え？」」

俺達は固まった。この浴衣、学校の物じゃなかったか？

「貰っても大丈夫なんですか？」

燕が言ったが、今の言葉は貰いに行ってる気がした。

「大丈夫よ。倉庫から出て来た物だし、ここは男子校だから、着る人いないもの。遠慮なく貰って頂戴」

そう言つて微笑む高梨先生に向かって

「「ありがとうございます！」」

俺達は頭を下げた。高梨先生はまだやる事があるでしようと言った。俺達が首を傾げると、先生は笑つて言った。

「じゃあ、着付けを覚えてね」

つまり、……………夏か 5ページ（後書き）

三十話めです！

思えば投稿し始めてもうそろそろ一ヶ月。

なんか嬉しいです！

「……」

「なんだよ、ボケーっとしちやって」

祭りの日、飾達の所に遅れた俺と燕は、息を整えながら聞いた。一同、固まって動かない。ポカンと口を開けている。人形か。

「まさかここまでとはな」

和樹がしみじみ言う。おっさんか。

「でもスゲーカワイイよ。似合ってる似合ってる」

飾が調子良く言う。チャラ男か。

「いや、やっぱこんな美少女と回れるって俺らついてるな」

「ついてるなって、友達だろうに」

優太が呆れた声を出す。まったくだ。

「とにかく祭りに行こう。今年は花火もやるみたいだし」

俺がそう言ったので、俺達は会場である時計広場に向かう。

「やっぱり歩きづらいな」

歩きながら、俺はぼやいた。すると横にいた修が

「しょうがないだろ？浴衣なんだし。それにその方が綺麗だからな」と言ってきた。カッコカッコとぽっくりの音をたてながら歩く俺。

「小股になるのも歩きづらい理由の一つだけど、何より下着を着ないってのが落ち着かない」

俺は髪を弄りながら言った。そうかと短く答えが返ってくる。修を見ると、普通の顔だ。

全く、からかいがない奴だ。

そうしているうちに時計塔広場に付いた。

「やっぱりスゲーよな。これは」

優太が感心している。でもこの祭りは確かに学校で行うレベルじゃないしな。俺も頷いた。

祭り会場は賑やかで、夜店が立ち並ぶ。中等部や大学部の生徒もい

るので、かなり混んでいた。俺達は祭りを楽しもうと、夜店を見ている。

「くじ引きやってるぞ」

飾が屋台を指差して言った。目を向けると、中等部の子達がくじを引いている。ゲーム機を狙っている様だ。

俺はハズレ商品を眺めて言った。

「やめよう。ハズレた時に嬉しくない」

「もうちよつと良いトコあると思うぜ」

和樹も言った。二人に否定されて黙り込む飾。

「ねえ、ヨーヨーすくいしよう」

ふいに燕が言ってきた。俺は燕に向かって

「すくった後ヨーヨーって邪魔じゃない？」

と言って流そうとした。しかし

「夏らしいからいいじゃん。ほらいくぞ」

と言って俺の腕を引っ張る燕。お前、今までの買う時、役立つかどうかとか考えてから買ってたじゃんか。夏らしいからって……どうした燕？

「おっちゃん。二回分」

そう言って小銭を渡す燕。まあいいか。俺もおっちゃんから道具を買った。

「やっぱ暑いなあ」

せつかくの祭りにこの言葉は興醒めだ。俺は綿菓子を食べながら思った。

横にいる燕は、飴細工で作られた蝶を食べている。和樹は焼きそばパックを大量に買い込んでいるし、修は射的で取ったトランプとゲーム機を持ちながらポップコーンを持っていて、飾はチョコバナナとかお好み焼きとか、食べ物類を買っていた。優太の手には焼き鳥だ。

「見事に食べ物ばかりだなあ」

綿菓子をつまみながら俺は言った。と、飾が、

「この後花火だろ？少し離れて見るから買つといたんだよ」

と言った。しかしこの量は多過ぎるだろ……

ふと見ると、手元の綿菓子が無くなっていた。

「なあ、花火が始まるのって、何時だ？」

花火が始まる前に、もう一本、綿菓子を買っておこう。

つまり、……………夏か 6ページ(後書き)

すみません！

昨日同じ話を二回投稿していました。

三十話はこちらでした。

つまりは文化祭！ 1ページ

夏休みが明け、ガヤガヤと騒がしい清涼学園。なんせ二学期最初のイベント。文化祭が近づいているからである。生徒一丸となって取り組むこのイベントは、どこの高校でも盛り上がっているのだろう。――さて、少しばかり、回想に入るとしよう。なあと、ほんの三ヶ月程前に――

文化祭が行われるのが、二学期始まってすぐだと、一学期、六月頃からどの出し物をやるとか、そんな事を決め始める。

「はい。それでは文化祭の出し物について、何か意見あるか？」

文化祭実行委員に、ついさっき決められた加藤誠吾かとう せいごは、クラスメイトに向かって言った。俺は珍しく起きている。

「はい」

後ろの方の席から声が上がった。真面目な意見を言う奴じゃない様だが、

「高田たかだか。何したいんだ？」

クラスのお調子者だから多分却下されるだろうな。そんな事を考えながら高田の言う事も上の空で聞いている。

「やっぱりメイド喫茶がいいです」

………やっぱりな。

「俺も賛成します！」

和樹、賛成するな。だが、俺は甘かった様だ。ここは男子校であり、クラスには普通男子しかないはずなのだ。

「俺も賛成します！」

和樹が最初に便乗して、じゃあ自分もと言う奴が出て来た。

「ちよつとまった！なんでメイド？」

燕が慌てて立ち上がり、否定するが、

「クラスに女子がいるんだぞ！」

と、クラスメイトの反発にあつて黙ってしまった。かと言って俺も黙っていたら、あんなフリフリした物を着なきゃいけない。俺は立ち上がって、教室の前に行った。加藤に教卓の前を開けてもらい、俺は言った。

「クラスに女子が二人しかいないのに、どうやって成り立たせるんだよ」

教室中の視線が俺に集まった。

「たった二人で喫茶店やるのは無理がある。そんな事をすれば、当日俺と燕は回れないだろ？」

とにかく理由を確立させる。で、確かにと頷かせる。こうすれば納得してくれるからな。

「確かに、二人に二日間働かせる訳にはいかないし……」

ふう……これで落ち着いたな。しかし、一度燃え上がった男子は、結構しぶとかった。

「じゃあ劇だ！劇をやるう。これなら二人でもできるだろうし、最悪三人にして一人ギャグでやれば問題無いはずだ」

納得出来る意見を飛ばして来た。糞、こいつ等どうしても「女子がいる事」と言う事を使いたいらしい。

劇と言うのは普通面倒がる物だが、俺が反論出来ないでいると、こぞとばかりに押して来た。

「劇なら良いだろ！」

「そうだ。これで当日も回れるじゃねえか」

迫って来る男子たちに、俺は頷いていた。

つまりは文化祭！ 2ページ

次の日、

文化祭で劇をやる事になった俺のクラスは、多分他のどのクラスよりもやる気に満ち溢れている。

「では、どのような内容にするか話し合うぞ」

加藤が声を張り上げる。おおーっ！と盛り上がるクラス。盛り上がり切れない俺と燕。

「女子が一人しか出てこないから、結構難しいな」

まともな意見が出た。登場人物に女子一人は、物語として成り立つのだろうか？……まあ、男子が一人しか出てこない物語もあるから大丈夫か。

「男子が女子になっちゃった話は？」

「それ俺のリアルライフ」

ベターで一人しか女子がいなくても大丈夫だが、俺が今その状況だ。「うーん、どんな話にしようか」

思ったより物語に作るのは難しいな。三人よれば文殊の知恵とか言うが、何人いても出てこないぞ。それでも内容を考えるのは執念なんだろうなもう。

「とりあえずみんな考えついたら持って来てくれ。その中から選ぶ」

今悩んでも出て来る事は無いと思ったのだろう。加藤が言った。

その日の話し合いは、これで終了した。

「成る程、劇か……これは文化祭大賞今年は決まった様なモンだな」
優太があごに手を当てながら言った。今居るのは寮の一室だ。

清涼学園の文化祭、水連祭すいれんさいは、毎年学園で最も人気だったクラスに文化祭大賞を与える事になっている。この賞を取ったクラスには、何故か豪華賞品がでる。賞品は毎年その時の校長先生がくれるのだ。
「女子がいるつてのは強いな」

修も頷く。まあ、高等部と大学部の生徒だけですごい事になるしな。
「でもまだ劇の内容が決まっていなんだよな」

燕がため息を吐く。女子がいるだけでかなり人気を集めるだろうが、劇の内容が悪かったら保護者人気で負ける。

「お前らは何をする事にしたんだ？」

俺は三人に聞いた。燕と飾は同じクラスだからな。

「俺んところは超縁日とか言うやつ。はつきり言って微妙かな」
修が笑って答えた。

「俺は焼きそば屋さん」

和樹が答える。

「お化け屋敷」

優太は疲れたように言った。俺は少し気になった。

「優太どうした？元氣ないな」

俺がそうきくと、優太は足を投げだしながら言った。

「文化祭実行委員なんだよ、俺。なのにまとまらなさすぎて疲れる
っ！」

優太が文化祭実行委員……これは手強いていっわ。

「猛、劇の練習とかって決まってるのか？」

燕が聞いて来た。暑いのか髪を上結び上げている。

「練習も何も内容がまだだろ。一週間後位にはきまつてるさ」
俺は呑気に答えた。

つまりは文化祭！ 2ページ（後書き）

総合ユニークは4000を超え、アクセスは26000を抜いた。
やっぶあいすごく嬉しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2964x/>

つまり

2011年10月31日16時22分発行